

仙台市文化財調査報告書第314集

仙台市太白区

北 目 城 跡

— 第6次発掘調査報告書 —

2007年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第314集

仙台市太白区

北 目 城 跡

——第6次発掘調査報告書——

2007年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃から多くなるご協力をいただき心より感謝申し上げます。

仙台市内には約800ヶ所の遺跡が発見されています。これらの遺跡は発掘調査が行われる度に、これまで先人の築いた悠久の歴史を現代に伝えてくれる使命を負っていると言えます。このような遺跡は、一度破壊されれば二度と元に戻すことは出来ないため、開発等により大きく現状が変更される際に発掘調査により記録保存を実施しています。これが先人の残した文化遺産を次の世代に伝えていく責務であると考えられます。

北目城跡は近世の仙台地方の成り立ちに関わる重要な城館跡です。これまでの調査により、障子堀の跡や建物に用いられた部材などが発見されていました。今回の調査ではそのような発見はありませんでしたが、今後とも必要な調査を継続し、城の内容を解明する努力をしてまいります。

仙台市教育委員会では、今後とも、各方面のご理解とご協力を頂きながら、遺跡をはじめとする文化財の保護と活用に取り組んでいく所存であります。今回の発掘調査及び報告書刊行にあたり、有限会社ベストウエスタン仙台に格別のご協力を賜りました。感謝を申し上げます。本書が北目城跡解明の手がかりになるよう期待しております。

平成19年3月

仙台市教育委員会

教育長 奥山 恵美子

例　　言

1. 本書は、ベストウェスタン仙台のホテル建設に先立って実施した北目城跡第6次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会のもとに、株式会社バスコが行った。
3. 本書の作成・編集は、仙台市教育委員会文化財課、工藤信一郎、長島栄一、株式会社バスコが行った。
4. 発掘調査の実施に当たり、(有)ベストウェスタン仙台より協力を賜った。
5. 調査及び報告書作成における記録類・出土遺物の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書の土色については「新版標準土色帖」（小山、竹原：1976）を使用した。
2. 本書掲載の地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台西南部」・「仙台東南部」（平成10年）を複製して使用した。
3. 本文・図版で使用した方位は真北で統一している。
4. 調査および報告書で使用した平面測量基準は、日本測地系平面直角座標第X系を基にしている。
5. 標高値は、海拔高度（T, P）を示している。
6. 本書に使用した遺構挿図の縮尺は、遺構全体図1/150、個別遺構図は1/20・1/40・1/60・1/80、調査区塊面セクション図は1/80で掲載している。
7. 本書で使用した遺物挿図の縮尺は、1/3である。
8. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S D : 溝跡	S K : 土坑	S R : 河川跡	S X : 性格不明遺構	P : ピット
----------	----------	-----------	--------------	---------
9. 遺物の登録・整理および報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。

A : 純文土器	B : 弥生土器	C : ロクロ不使用の土師器
D : ロクロ使用の土師器	E : 須恵器	I : 陶器
J : 磁器	K : 石器・石製品	L : 木製品・材・杭
○ : 自然遺物		
10. 遺物観察表中の（ ）内数値は推定値を示す。
11. 遺構・遺物図版に使用したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。



炭化物範囲



木製品



黒色処理

目 次

序 文
例 言
凡 例

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章 調査の概要	4
第1節 調査方法および調査記録	4
第2節 基本層位	5
第3節 発見された遺構と出土遺物	7
1 IIIa層の遺構と遺物	7
(1) 井戸跡	7
(2) その他の遺構	7
2 IIIb層の遺構と遺物	9
(1) 小溝状遺構	9
3 Va層の遺構と遺物	10
(1) 溝跡	10
(2) 土坑	12
4 Vb層の遺構と遺物	13
(1) 河川跡	13
5 VII層の遺構と遺物	14
(1) 河川跡	14
(2) VII層出土遺物	14
6 VIII層の遺構と遺物	16
(1) 溝状遺構	16
(2) 性格不明遺構	17
(3) 河川跡	17
(4) VIII層出土遺物	18
(5) その他の遺構	24
第3章 まとめ	25

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

平成17年5月に仙台市太白区東郡山2丁目522-1他において、ホテル建設が計画され、事業主である(有)ベストウェスタン仙台より埋蔵文化財の取扱いに関する協議書が提出された。開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である北日城跡の範囲内に該当していることから、仙台市教育委員会では建築工事により破壊が予想される部分を対象として確認調査を実施することとした。

今回の開発予定地は旧字名で館ノ内という地名であり、北日城跡の中心部と想定された。6月20日より建築部分を対象に、調査トレンド2箇所を設定して確認調査を実施している。その結果、西区では擾乱が深くまで及んでおり、城跡の遺構は残存していないが縄文時代後期後葉の遺物が出土し、遺物包含層が確認された。東区では古代から中・近世にかけての遺構面が存在することから、事業計画に当たり本発掘調査が必要である旨を事業主に通知した。

ホテル建設計画については、度重なる協議を経て、一部計画を変更してホテル建設を行うこととなった。

仙台市教育委員会は事業主より依頼を受けて平成18年6月12日より本発掘調査を開始した。

第2節 調査要項

遺跡名	北日城跡（宮城県遺跡登録番号01029）
調査名	北日城跡第6次発掘調査
所在地	仙台市太白区東郡山2丁目522-1他
調査原因	ホテル建設
調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
調査担当	調査係主任　工藤 信一郎　長島 葉一 調査員　伊藤 雅乃（株式会社バスコ） 調査補助員　酒井 中（株式会社バスコ）
調査期間	発掘調査　平成18年6月12日～8月11日
調査面積	調査対象面積　600m ² 実調査面積　343m ²

第3節 遺跡の立地と歴史的環境

北日城跡は仙台市南東部の太白区郡山4丁目から東郡山2丁目にかけて所在し、北東を広瀬川、南を名取川、西を長町一利府構造線によって画された郡山低地の中央より東側に位置しており、JR東北本線長町駅の東方約1.2kmの標高9～11mの自然堤防上に立地している。北日城跡は郡山遺跡と接しており、城跡中央付近は国道4号線仙台バイパスが南西から北東に走り、仙台南部道路の長町インターチェンジから通する都市計画道路がそれに直交している。

北日城跡を含む郡山低地及びこれを望む青葉山丘陵南側にかけての地域は、仙台市内でも遺跡が密集する地域として知られており、旧石器時代から現代に至るまで連続と続く人類の足跡をたどることができる。

旧石器時代の遺跡は、名取川流域では山田上ノ台遺跡、富沢遺跡などがある。山田上ノ台遺跡では、ナイフ形石器を含む後期旧石器が321点出土している。富沢遺跡では後期旧石器時代の焚き火跡が検出され、その周辺から100点以上の石器と当時の環境を復元できる樹木や球果、葉、昆蟲、動物の糞などが発見されている。

縄文時代の遺跡は、名取川流域の丘陵や段丘上に立地する八木山神跡遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、上野遺跡、三神峯遺跡、低地に立地する下ノ内浦遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、大野山遺跡などがある。

早期の遺跡としては、下ノ内浦遺跡で早期前葉の日計式期の竪穴住居跡2軒、小竪穴状遺構1基、土坑などが発見

され、北前遺跡で早期末葉の竪穴住居跡8軒、土坑などが発見されている。

前期の遺跡としては、三神峯遺跡で前期初めの竪穴住居跡8軒、八木山緑町遺跡で前期末から中期初めの竪穴住居跡5軒が発見されている。

中期の遺跡としては、段丘上において上野遺跡で中期中葉から末葉にかけての竪穴住居跡や溝状造構、土坑などが多数発見され、また山田上ノ台遺跡で中期末葉の竪穴住居跡33軒、埋設土器や土坑などが発見され、縄文時代の大規模集落であったことが明らかとなっている。低地においては、六反田遺跡で中期中葉と末葉の竪穴住居跡各1軒が発見され、下ノ内遺跡では中期末葉の竪穴住居跡3軒で、複式炉のある敷石住居が発見されている。

後期の遺跡としては、六反田遺跡で後期初めの竪穴住居跡12軒のほか、配石造構や土坑など、下ノ内浦遺跡で後期前葉の配石墓9基、集石造構、土壙墓などで構成される墓域が発見されている。大野田遺跡でも同時期の環状集石群や遺物包含層などが発見され、環状集石群の中には配石造構、埋設土器造構、土壙墓が発見され、270点以上の土偶が出土しており、墓域と祭祀の場が一体となっていたことが明らかとなっている。

伊古田遺跡では、後期中葉の遺物包含層が発見され、19体分の土偶が出土している。王ノ塙遺跡では、後期中葉から後葉の環状配石造構、竪穴造構、埋設土器造構などが発見されている。郡山遺跡では、後期後半の土器が出土している。

晩期の遺跡としては、山口遺跡・郡山遺跡、西台畠遺跡で土器片が出土している。

弥生時代の遺跡としては、丘陵や段丘上に立地する八木山緑町遺跡・土手内遺跡・原遺跡、低地に立地する富沢遺跡・下ノ内浦遺跡・山口遺跡・西台畠遺跡・長町駅東遺跡などがある。

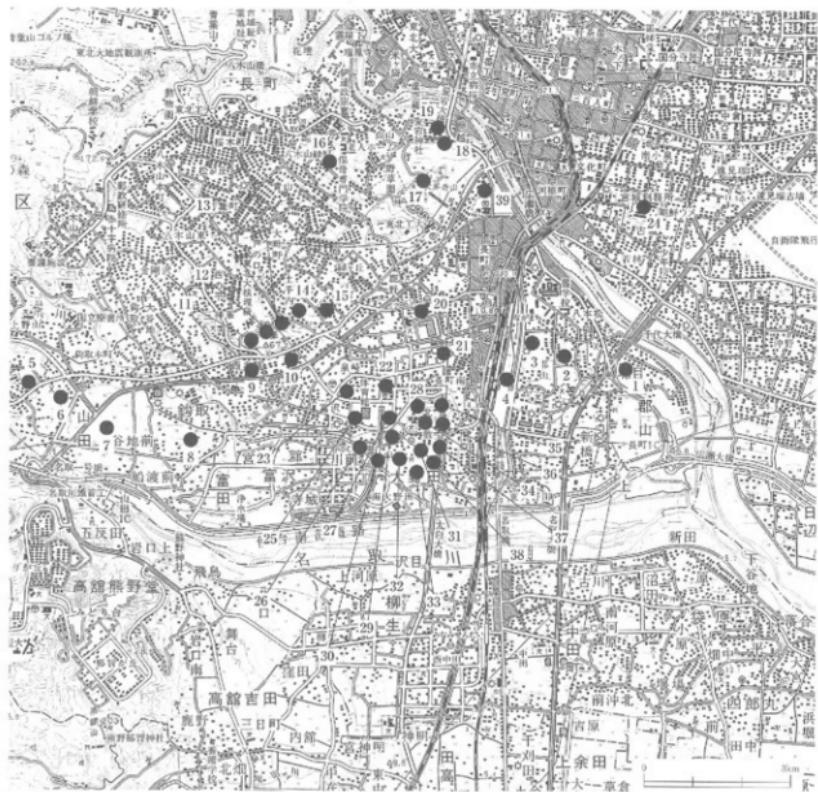
八木山緑町遺跡・土手内遺跡では、後期の天王式期の竪穴住居跡が各々1軒、原遺跡でも同時期の竪穴住居跡5軒が発見されている。下ノ内浦遺跡では天王式期の竪穴造構1基、土壙墓1基、上器棺墓3基が発見され、土壙墓からは太形蛤刃石斧、石庖丁が出土している。西台畠遺跡や長町駅東遺跡では弥生時代中期の土器棺墓、土壙墓などが発見されている。富沢遺跡や山口遺跡では中期から後期の水田跡が発見され、木製農耕具や石庖丁などが出土している。

古墳時代の遺跡としては、西多賀から愛宕山の青葉山丘陵南斜面から裾部にかけての地域で、前期末から終末期にかけて裏町古墳・兜塚古墳・砂押古墳などの前方後円墳・円墳や愛宕山・大年寺山などの丘陵斜面に横穴墓群が多く造られ墓域として利用されている。また、低地においても大野田や富沢にも大野田古墳群・五反田古墳・教塚古墳など造られている。

この時代の集落跡は、丘陵部の土手内遺跡で前期から中期にかけての竪穴住居跡が11軒発見されている。低地では名取川の自然堤防上に立地する下ノ内遺跡・伊古田遺跡・六反田遺跡などで前期から後期にかけて竪穴住居跡が発見されているほか、集落跡に隣接した富沢遺跡では水田跡が発見されている。

飛鳥時代から平安時代の遺跡としては、郡山遺跡で7世紀後半の役所跡であるⅠ期官術と7世紀末から8世紀初頭の官術であるⅡ期官術と付属寺院が造られ、Ⅱ期官術は陸奥国府多賀城以前の国府と考えられている。また奈良・平安時代には、下ノ内遺跡をはじめ伊古田・六反田・山口・下ノ内浦・元袋遺跡などで竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見され集落跡が増加してきており、富沢・山口遺跡では水田跡が発見され、生産の場として営まれている。

中世から近世にかけての遺跡としては、丘陵では大年寺山に粟野氏の居城である中世の山城である茂ヶ崎城が築城され、大野田には中世の屋敷跡の王ノ塙遺跡で発見されている。北日城跡は粟野氏の居城であり、その規模は東西約500m、南北約500mの平城である。慶長5年に閔ヶ原の合戦が始まると伊達政宗は北日城に入り、ここを拠点として会津の上杉景勝方と対峙した。その後、仙台城に政宗が移ると北日城に廻った家臣たちも、仙台城下に移封され、城は廃城となる。城下にも「北目」という地名があるのもそのためである。北日城がなくなつてからは、館ノ内・出丸などの名称は残っていたが、農村の姿に変貌し、昭和40年頃まで変わることはなかった。



No	遺跡名	種別	立地	時代	No	遺跡名	種別	立地	時代
1	足利跡	城跡	荒河原	自然堤防	16	大内跡	城跡	水田地	平安～近世
2	郡山跡	城跡	守衛所	自然堤防	17	郡山跡	城跡	水田地	平安
3	西河岸遺跡	集落跡	斜面地	自然堤防	18	郡山跡	城跡	河岸	平安
4	長町聚落遺跡	集落跡	自然堤防	生糸～奈良	19	郡山跡	城跡	河岸	平安～近世
5	北前田遺跡	集落跡	谷地	平安	20	郡山跡	城跡	水田地	平安～中世
6	田口上ノ分遺跡	集落跡	谷地	平安	21	郡山跡	城跡	水田地	平安～近世
7	白山魚沼遺跡	魚沼遺跡	自然堤防	平安	22	郡山跡	城跡	水田地	平安～近世
8	上野遺跡	城跡	自然堤防	平安	23	郡山跡	城跡	河岸	平安
9	豊造跡	城跡	自然堤防	平安	24	郡山跡	城跡	河岸	平安
10	高館古墳	前方後円墳	丘陵	古墳（中期）	25	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
11	新河原跡	城跡	丘陵斜面	平安	26	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	平安～中世
12	二神寺古墳群	円墳	丘陵	古墳（後期）	27	下ノ内遺跡	集落跡	水田地	平安
13	三神峯遺跡	城跡	丘陵	平安	28	六代目遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
14	土手内遺跡	集落跡	丘陵	平安	29	瓦反石古墳	円墳	自然堤防	古墳
15	妙谷古墳	円墳	丘陵	古墳	30	伊豆山遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～中期～中世
16	八木山跡	集落跡	丘陵	平安	31	大野山古墳群	円墳	自然堤防	古墳～古墳～平安
17	鬼ヶ崎城跡	城跡	丘陵	中世	32	春日古墳	円墳	自然堤防	古墳（中期）
18	八年寺山根穴忍者	丘陵斜面	古墳（後期）	平安	33	高砂古墳群	前方後円墳	自然堤防	古墳
19	愛宕山穴忍者	穴開	丘陵斜面	古墳（後期）	34	御宿跡	集落跡	自然堤防	平安
20	金剛八幡古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	35	元気遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
					36	大野山跡	集落跡	自然堤防	平安
					37	王ノ道遺跡	集落跡	自然堤防	平安
					38	王ノ廻古墳	円墳	自然堤防	古墳
					39	鬼子母神	前方後円墳	自然堤防	古墳（中期）

第1図 北目城跡周辺の遺跡

第2章 調査の概要

第1節 調査方法及び調査記録

1.調査の方法

本調査の実施については協議の中で、事業主よりホテル建設位置変更の申し出があったことから、前年度に確認調査を実施した試掘トレンチの約20m南側に本調査区を設定し、調査を開始することになった。その結果、調査対象地区の西側約80m²については大規模な基礎構造物が確認され、遺構確認面が消失していたことから、この箇所のみ土層断面の観察に留めた。

調査にあたり、I層・II層については重機により掘り下げ、その後人力によりIII層～V層までの調査を行った。VI層調査終了後、西側での土層観察から無遺物層と判断されたVI層については重機により掘り下げ、その後再び人力によりVI層及びⅦ層の調査を行った。



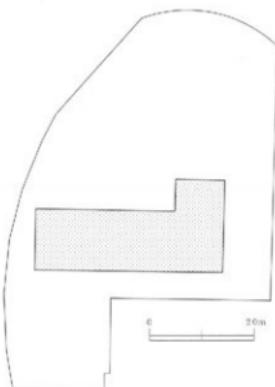
第2図 調査地点位置図

2.調査記録の作成

測量は、「平面直角座標系第X系」を基準としている。5×10mを単位とする平面区配図を作成し、1～14までの番号を付し図面の作成を行った。遺構図面の作成にあたっては、トータルステーションを中心とした測量、デジタルカメラによる写真実測または手実測により行った。

トータルステーションによる図面の表現方法などの基本的な仕様については、仙台市長町駅東遺跡のものを参考資料として作成することにした。

遺物の取り上げにあたっては、測量基準とした平面区配図の番号をグリッド名として利用した。原則として、5×10m単位で取り上げている。特に必要と認められた遺物については、出土位置とレベルを記録している。



第3図 調査区配置図

第2節 基本層位

今回の調査区は標高10m程の現地表から約4.5mの深度があり、南駆断面の観察により大別して8層の土層と埋没した河川跡が確認された。調査区の東半は土層がほぼ平行に堆積しているが、西半は上層より数条の河川跡が重複している。基本層位は第Ⅰ層が、現地表を形成する整地のために入れられた礫やコンクリートを含む盛上の層である。第Ⅱ層は盛土以前の畑の耕作土である。一部グライ化している部分がある。第Ⅲ層は、中・近世の遺物を含む粘土質シルトの層で2層に分けられる。上層のⅢa層からは井戸跡やピットが、下層のⅢb層からは小溝状遺構群などが検出されている。第Ⅳ層は畑の天地返しにより、分断された薄い粘土質シルト層で遺構、遺物は検出されない。

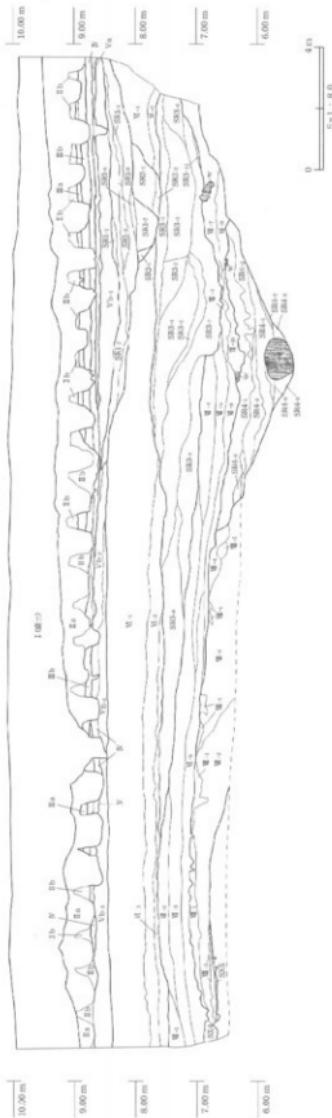
第Ⅴ層は、古代の遺物や炭化物を含む粘土質シルト層で、3層に分けられる。Ⅴa層とⅤb層の上面で土坑や溝跡が検出されている。Ⅴc層は、80~120cm程、厚く堆積したシルト層で、2条の河川跡に侵食されている。第Ⅵ層は、弥生~縄文時代の遺物を含むシルト層で、微細な差により10層に細分される。上層からの河川跡により侵食されている。第Ⅶ層は、縄文時代後期から晩期にかけての遺物を含むシルト層で、一部に砂が含まれ、7層に細別される。

調査区の西半部を河川跡が侵食しているため、上層へも影響を与え、河川跡が重複する様相を形成している。

今回の調査ではⅢ層の上面で城館に関わる遺構、遺物が検出されてもよいはずであるが、直接結びつく発見はなかった。また隣接する郡山遺跡では弥生時代初頭の遺物や、中期頃の水田跡が発見されていたが、そのような遺構や土層はなかった。調査区内で発見された河川跡の影響などで土層の堆積状況や遺構のあり方に大きな違いが生じたためと考えられる。

第Ⅰ層から第Ⅸ層までの土層の詳細は以下のとおりである。

層位	土色	土性	備考
I層			現在の地表を形成する表土。盛土。
Ⅱa層	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	盛土される以前の例の耕作土。1980年頃までは農地として利用されていた。
Ⅱb層	10YR5/3 にぶい黄褐色		畑の耕作土ではあるが、やや通るもの。
Ⅲa層	10YR3/3 喧褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
Ⅲb層	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
Ⅳ層	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
Va層	10YR4/4 喧褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
Vb-1層	10YR3/3 喧褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
Vb-2層	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
Vb-3層	10YR3/3 喧褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
VI-1層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	
VI-2層	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	
VI-3層	10YR7/1 灰白色	シルト	
VI-4層	10YR6/1 黄灰色	シルト	
VI-5層	10YR7/1 灰白色	シルト	
VI-6層	10YR4/1 海灰色	シルト	
VI-7層	10YR5/1 黄灰色	シルト	
VI-8層	10YR4/1 黄灰色	シルト	
VI-9層	10YR4/1 黄灰色	シルト	
VI-10層	10YR3/1 黑褐色	シルト	
VI-11層	10YR4/1 黄灰色	シルト	
VI-12層	10YR7/2 にぶい黄褐色	シルト	
VI-13層	10YR6/1 黄灰色	シルト	
VI-14層	10YR7/2 にぶい黄褐色	シルト	
VI-5層	10YR5/1 黄灰色	シルト	砂が少量混じる。
VI-6層	10YR7/1 灰白色	砂	
VI-7層	10YR7/1 灰白色	シルト	砂が少量混じる。



透構名	層位	土色	上性	標	透構名	層位	土色	土性	備考
SR1	1 10YR4/3	黒褐色	シルト	黄色のシルトブロックが少量混じる	SR1	1 10YR3/1	黒褐色	砂	植物遺体を含む
	2 10YR5/4	黒褐色	シルト	黄色のシルトブロックが多く混じる		2 10YR2/1	黒褐色	シルト	植物遺体を少含む
	3 10YR3/2	黒褐色	シルト	黄色のシルトブロックが少額混じる		3 10YR1/1	褐色	シルト	砂が少量混じる
SR2	4 10YR3/1	黒褐色	シルト		4 10YR2/1	褐色	シルト	トド・クルミ等の植物遺体を大量に含む	
	5 10YR3/2	黒褐色	シルト		5 10YR2/1	黒色	シルト	植物遺体を多く含む	
	6 10YR4/2	灰褐色	シルト	鉄分を多く含む	6 10YR2/2	黒色	シルト	水孔が少量混じる	
SR2	7 10YR6/2	灰褐色	砂		7 10YR2/2	黒色	シルト		
	1 10YR3/3	暗褐色	シルト		8 10YR5/1	褐色	シルト	砂が少量混じる	
	2 10YR3/2	黒褐色	シルト		9 10YR4/1	褐色	シルト		
	1 10YR5/2	灰褐色	シルト		10 10YR5/1	褐色	シルト	砂が少量混じる	
	2 10YR6/1	褐色	シルト						
	3 10YR7/1	灰白色	シルト						
	4 10YR6/2	灰褐色	砂	砂が少量混じる					
	5 10YR4/1	褐色	シルト	腐化物を多く含む					
SR3	6 10YR4/4	褐色	シルト						
	7 10YR5/2	灰褐色	砂	鉄分を多く含む					
	8 10YR5/1	褐色	シルト	腐化物が少額混じる					
	9 10YR8/1	灰白色	シルト						
	10 10YR5/1	褐色	シルト						

第4図 調査区南壁セクション

第3節 発見された遺構と出土遺物

1 IIIa層の遺構と遺物

Ⅲa層からは井戸跡2基とピット等が発見された。

(1) 井戸跡

① S E 1 井戸跡 (第 7 図)

長軸200 cm、短軸180 cmの楕円形で、深さは3 m程度である。検出面から底面に向かって細くなる。底面はほぼ平坦である。堆積上の状況から3層に大別されるが、埋め戻しや掘り直しを示すものは明らかではない。

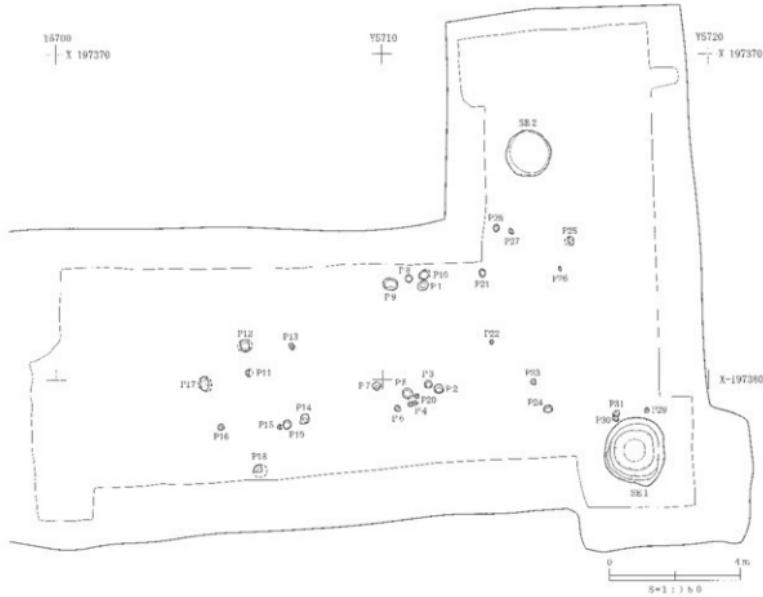
遺物は第3層からK-1石鉢(第6図1)、K-2砥石(第6図2)が、第10層から長さ150cm、太さが直径30cmのO-1樹木片が出土している。

② S E 2 井戸跡 (第7図)

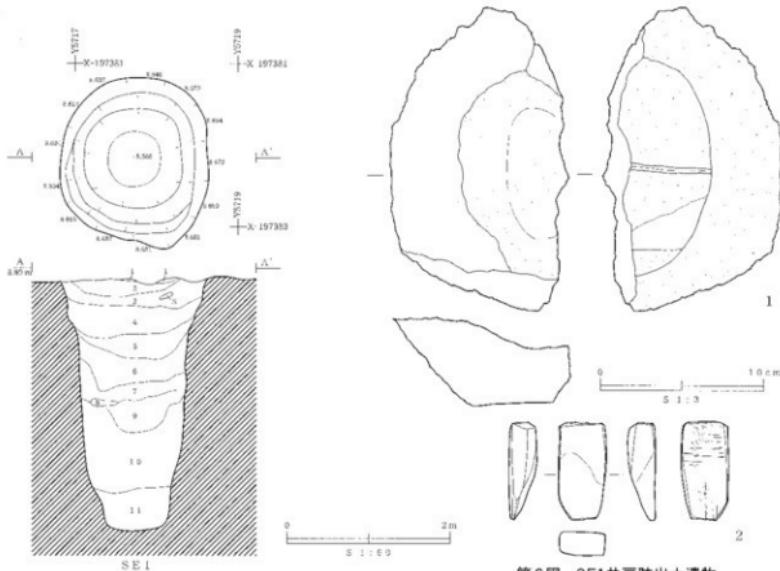
直径140cmの円形で、深さは2m程である。検出面から底面に向かって垂直となる。底面は平坦である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

(2) その他の遺構 (第5図)

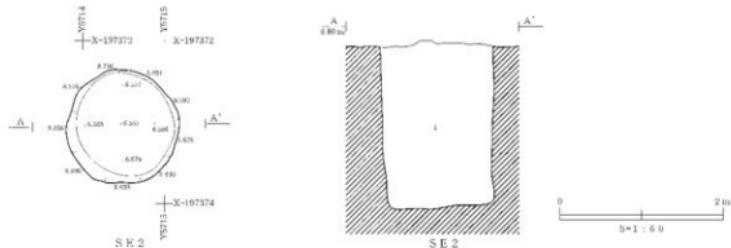
調査区の南側からピットが31基検出された。直径30cm前後のものが多いが、そのうち柱痕があるものはP2、P9、P10、P12、P15、P17、P24、P25である。埋土や柱間について検討したが、共通性や規則性がなく、掘立柱建物跡や廻跡になるものは認められなかった。



第5図 IIIa層遺構配置図



第6図 SE1井戸跡出土遺物



遺構名	層位	土色	土性	備考
SE1	1	10YR7/4 にぶい黄褐色	シルト	粘性やや強く、白色粘土粒(直徑3~6cm)を含み、團状を呈す
	2	10YR4/2 黄褐色	粘質土	しまり強く、炭化物粒(直徑0.5~2cm)2%含む
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘質土	燒繩・粘土ブロック(10YR7/8、直徑3~6cm) 1%含み、團状を呈す
	4	10YR5/2 黄褐色	粘質土	炭化物粒(直徑0.5~1cm)1%・粘土ブロック(10YR7/8・直徑3~9cm)15%
	5	10YR8/3 浅黄褐色	シルト	粘性やや強く、酸化鉄を少量含む
	6	10YR7/3 にぶい黄褐色	シルト	粘性やや強く、炭化物粒(直徑0.5~2cm)2%含む
	7	10YR5/1 暗灰色	粘質土	粘性やや強く、炭化物粒(直徑0.5~2cm)3%・木片を含む
	8	10YR7/3 にぶい暗褐色	シルト	粘性弱く、酸化鉄を含む。地山崩落による再堆積
	9	10YR6/1 暗灰色	シルト	粘性強く、木片を少量含む有機物起源の層
	10	5G6/1 緑色	粘質土	粘性強く、軟らかい
	11	10YR4/1 暗灰色	粘質土	粘性強く、軟らかい。木片を少量含む
SE2	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘質土シルト	しまりやや強く、白色粘土ブロック(直徑3~6cm)を20%含む

回収番号	登録番号	遺構名	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	写真番号
第6図1	K-1	SE1	3層	石絆	18.2	10.5	5.3	980		31-1
第6図2	K-2	SE1	3層	既石	6.1	2.9	1.5	40		31-2

第7図 SE1・SE2井戸跡 平面・断面図

立場名	平面形	底面幅 (cm)	深さ (cm)	標土	鉛灰跡	造溝名	平面形	底面幅 (cm)	深さ (cm)	堆土	柱留跡
P'01	横円形	30×77	8	10YR6/3に少し黄褐色	無	P'17	不明	640×120	18	10YR6/1褐色	無
P'02	円形	28×26	15	10YR6/2灰褐色	無	P'18	不明	632×120	7	10YR6/2褐色	無
P'03	円形	23×22	10	10YR6/1褐色	無	P'19	円形	370×34	25	10YR6/3褐色	無
P'04	小豊田形	31×11	8	10YR4/2灰色	無	P'20	円形	14×13	5	10YR4/1褐色	無
P'05	円形	32×30	4	10YR7/3に少し黄褐色	無	P'21	横円形	20×19	8	10YR7/2灰褐色	無
P'06	横円形	20×17	6	10YR7/3に少し黄褐色	無	P'22	円形	14×11	7	10YR7/2灰褐色	無
P'07	横円形	28×23	19	10YR4/2に少し黃褐色	無	P'23	円形	171×160	9	10YR6/6褐色	無
P'08	円形	21×21	9	10YR6/3に少し黄褐色	無	P'24	横円形	28×22	5	10YR6/7に少し黄褐色	無
P'09	横円形	26×36	12	10YR6/3に少し黄褐色	有	P'25	不明	630×110	14	10YR6/4に少し黄褐色	石
P'10	横円形	180×120	18	10YR6/3に少し黄褐色	無	P'26	円形	140×120	6	10YR6/3灰褐色	無
P'11	平凹	122×110	11	10YR6/1褐色	無	P'27	小豊田形	20×11	9	10YR7/2灰褐色	無
P'12	平明	136×126	20	10YR6/3に少し黄褐色	石	P'28	横円形	24×18	7	10YR6/4灰褐色	無
P'13	横円形	136×130	9	10YR5/1褐色	無	P'29	円形	16×14	7	10YR7/5に少し黄褐色	無
P'14	平豊円形	34×34	25	10YR4/3褐色	有	P'30	横円形	20×18	10	10YR7/2灰褐色	無
P'15	小明	140×130	2	10YR5/1褐色	無	P'31	横円形	22×18	11	10YR6/1褐色	無
P'16	圓丸形	20×17	38	10YR6/3褐色	無						

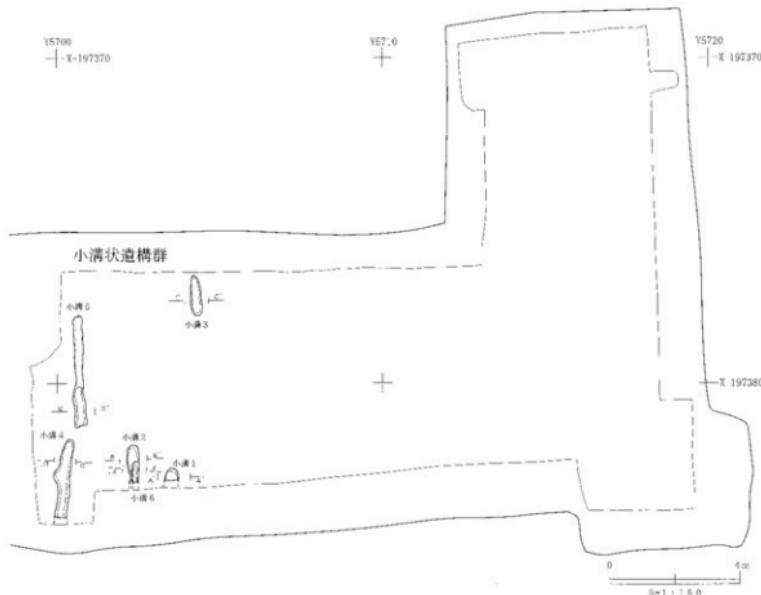
ピット一覧表

2 IIIb層の遺構と遺物

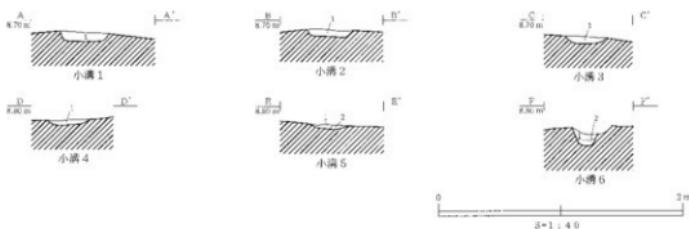
IIIb層からは小溝状遺構群が発見された。

(1) 小溝状遺構群 (第8図)

調査区の西側で6条ほど断続する状況である。いずれも方向は真南北方向であるが、上幅は23~50cm、下幅は8~39cm、深さ2~8cmである。堆積土は全てシルトであるが、色調に違いがある。



第8図 IIIb層遺構配置図



地構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	層位	土色	土性	備考
小溝1	38	30~44	9.3	1	10YR4/1 緑灰色	シルト	少量の白色ブロック直径5mmと鉄分が混じる
小溝2	116	24~38	5.2~6.3	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	白色シルト内に鉄分が混じる
小溝3	125	22~34	5.1~5.9	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	白色シルトブロックと鉄分が混じる
小溝4	124	32~52	4.0~6.6	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	白色シルトブロックと鉄分が混じる
小溝5	343	21~39	1.6~3.7	1	10YR4/1 緑灰色	シルト	白色シルトブロック直径1mmと鉄分が混じる
小溝6	64	16~21	14.3~16.5	1	10YR6/1 緑灰色	シルト	白色シルトブロックと鉄分が混じる
				2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	白色シルトブロック1mmと鉄分が混じる

第9図 小溝状造構断面図

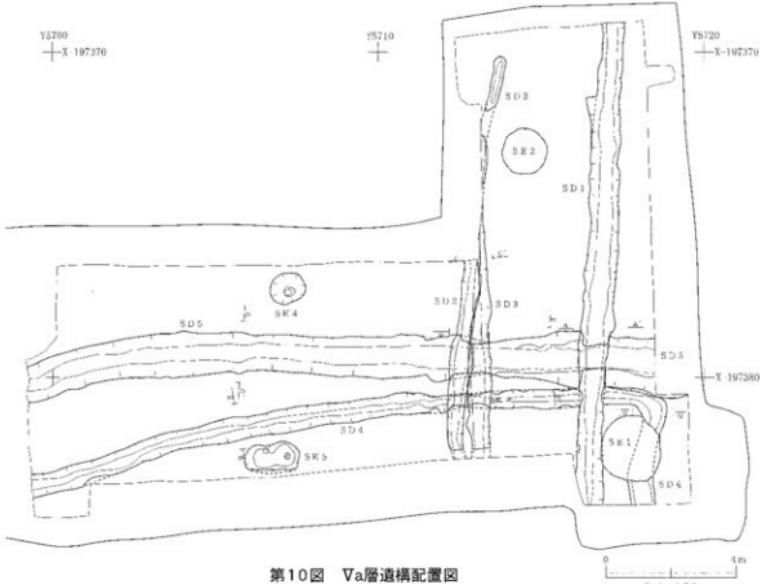
3 Va層の造構と遺物

Va層からは土坑2基と溝跡5条が発見された。

(1) 溝跡

① SD 1溝跡（第10図）

調査区の東側で南北方向に15m以上延びる溝跡である。上幅25~40cm、下幅12~23cm、深さ25~60cmで、断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。調査区南側でSD 4、SD 5溝跡を切っている。



第10図 Va層造構配置図

② SD 2溝跡（第10図）

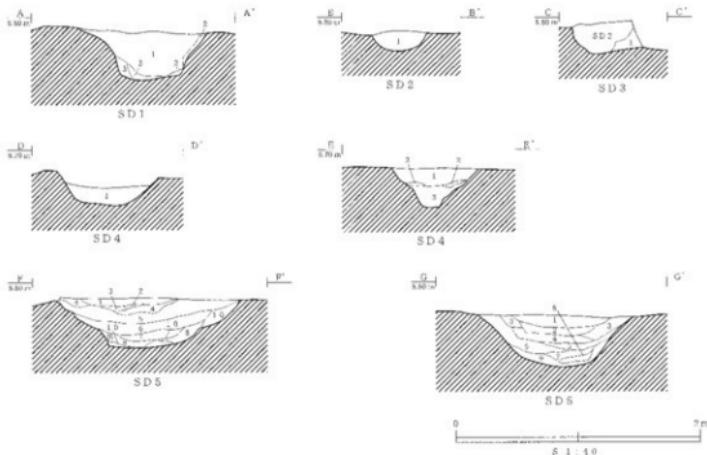
調査区の東側でSD 3溝跡と重複しながら南北方向に6.8m以上延びる溝跡である。上幅46~70cm、下幅16~44cm、深さ10~23cmで、断面形はU字形である。遺物は出土しなかった。SD 3、4、5溝跡を切っている。

③ SD 3溝跡（第10図）

調査区の東側でSD 2溝跡と重複しながら南北方向に12m以上延びる溝跡である。上幅60~70cm、下幅10~40cm、深さは9~14cmで、断面形はU字形で底面のみ平坦である。遺物は出土しなかった。SD 4、5溝跡を切っている。

④ SD 4溝跡（第10図）

調査区の南側を東西方向に20m延び、南に屈曲する溝跡である。上幅54~65cm、下幅10~30cm、深さは20~30cmで、断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。SD 1、2、3溝跡に切られている。



縦断名	層位	上色	上性	備考	
				SD1	SD2
SD1	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘質シルト	酸化鉄を少量含む	
	2	10YR4/2 灰黃褐色	粘質土	樹木土層じりで斑状を呈す	
	3	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘質シルト	灰白色シルト混じりで斑状を呈す	
SD2	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘質シルト	酸化鉄を含む	
SD3	1	10YR7/2 にぶい黄褐色	砂質土	酸化鉄を含み、やや硬い	
SD4・D	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	しまり弱く、酸化鉄を少量含む	
SD4・E	1	10YR4/2 灰黃褐色	粘質シルト	粘性土や強く、斑状を呈す。グライ化層	
	2	10YR5/2 灰黃褐色	シルト	ややしまり強い	
	3	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	しまり弱く、酸化鉄を少量含む	
SD5	1	10YR4/1 楊灰色	シルト	しまり弱く、砂粒少量含む	
	2	10YR5/1 楊灰色	粘土	しまり弱い	
	3	10YR4/2 灰黃褐色	シルト	しまり弱く、粘性強い	
	4	10YR7/3 にぶい黄褐色	粘質土	しまりやや強く、砂粒少量含む	
	5	10YR5/1 楊灰色	シルト	粘性やや強い	
	6	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	しまりやや弱く、砂粒少量含む	
	7	10YR4/1 楊灰色	シルト	しまり弱く、砂粒少量含む	
	8	10YR4/2 灰黃褐色	シルト	粘性強く、砂粒少量含む	
	9	10YR5/2 灰黃褐色	シルト	粘性やや強く、黄色粘土を含む	
	10	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質土	しまり弱く、砂粒弱い	

第11図 SD1~SD5溝跡断面図

⑤ S D 5 溝跡（第10図）

調査区のはば中央を東西方向に23m以上延びる溝跡である。上幅108~145cm、下幅30~80cm、深さは10~42cmで、断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。SD 1、2、3溝跡に切られている。

(2) 土坑

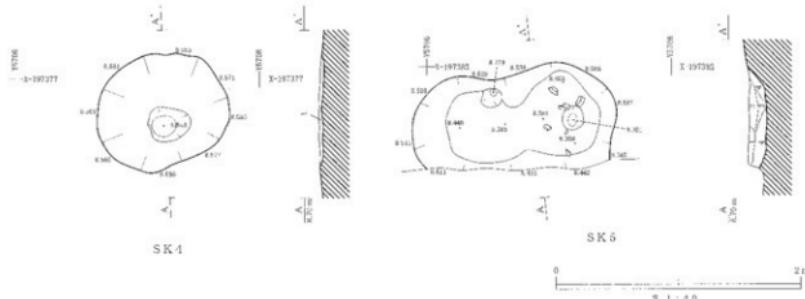
① SK4土坑（第12図）

調査区の北側に位置し、長軸108cm、短軸90cmの楕円形で、深さは3cmの極浅い土坑である。底面のほぼ中央に直径29cmの範囲で焼土が検出された。遺物は出土しなかった。

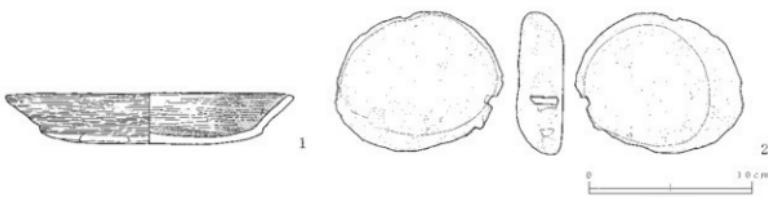
② SK5土坑（第12図）

調査区の南側に位置し、長軸168cm、短軸85cm以上の中央がややくびれた瓢箪形で、北側が調査区外に延びている。深さは14cmの土坑である。堆積土は4層で、全て粘土質シルトであるが、色調に違いがある。

遺物は底面から、内面黒色処理された土器C-1壺（第13図1）、扁平なK-3磨石（第13図2）が出土している。



第12図 SK4・SK5土坑平面図・断面図



第13図 SK5土坑出土遺物

登録番号	登録番号	遺構名	基本層位	種別	器形	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外面	内面	備考	呼称番号
第13図1	C-1	SK5	Va層	土器	壺	17.7	13.7	1.7	ミコナギ	ヘラミガキ		33-1
第13図2	K-3	SK5	Va層	磨石		10.3	7.9	2.4				33-2

4 Vb層の遺構と遺物

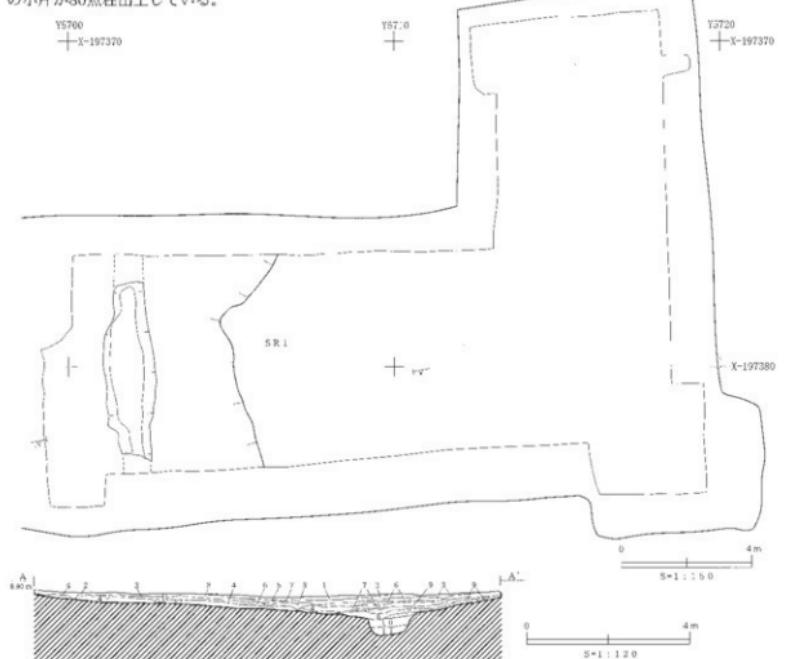
Vb層からは河川跡2条が発見された。

(1) 河川跡

① SR1河川跡 (第14図)

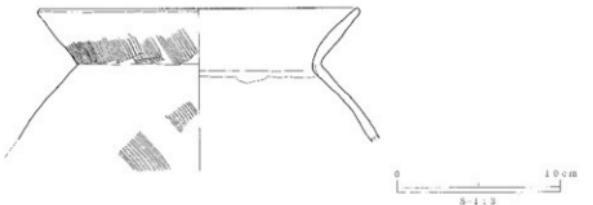
調査区の西側で南北方向に4.3m以上延びる河川跡である。調査区南壁で上幅6.7m以上で、中央がやや窪んでいる。深さは90cmである。堆積土はにぶい黄褐色シルトや黒褐色シルトなどであるが、中央の最も窪んだ箇所では砂が堆積している。この河川跡の下層には位置をほぼ同じくして、3条の河川跡が重複している。

遺物はSR1 3層中からハケメの施された土師器C-2型(第15図)が出土している。また堆積土中から土師器の小片が80点程出土している。



遺構名	層位	上色	土性	編番
SR1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト 黄褐色シルトブロックが少量混じるシルト。しまり有	
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト 黄褐色シルトブロックを多く含むシルト。しまり有	
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト 黄褐色シルトブロックが少量混じるシルト。しまり有	
	4	10YR3/1 黒褐色	シルト	
	5	10YR3/2 黑褐色	シルト しまり有。鉄分を多く含む	
	6	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまり有	
	7	10YR6/2 灰黃褐色	砂質シルト しまり無	
	8	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト しまり有。鉄分を多く含む	
	9	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト 白色シルト混じる。しまり有	
	10	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト 鉄分を多く含む	
	11	10YR6/2 灰黃褐色	砂 鉄分を多く含む	

第14図 Vb層遺構配置図・SR1河川跡断面図



回収番号	登録番号	遺構名	基本層位	種別	器形	口径(cm)	底径(cm)	脚高(cm)	外面	内面	備考	保管番号
第15回	C-2	SR1	Vb層	上師器	実	19	-	-	ハケメ	ヘジナデ		32-1

第15図 SR1河川跡出土遺物

② S R 2 河川跡（第4図）

調査区南壁中でSR1河川跡の下層で検出した。上幅190cm、下幅100cm、深さは50cmである。堆積土は暗褐色シルトや黒褐色シルトである。SR1河川跡の最下層部により大きく抉られている。

5 VII層の遺構と遺物

VII層からは河川跡1条が発見された。

(1) 河川跡

① S R 3 河川跡（第4図）

調査区南壁中でSR1、2河川跡の下層で検出した。上幅12m以上、下幅は不明瞭で、深さは100cmである。堆積土は灰白色シルトや褐色シルトで、最下層に砂が堆積している。

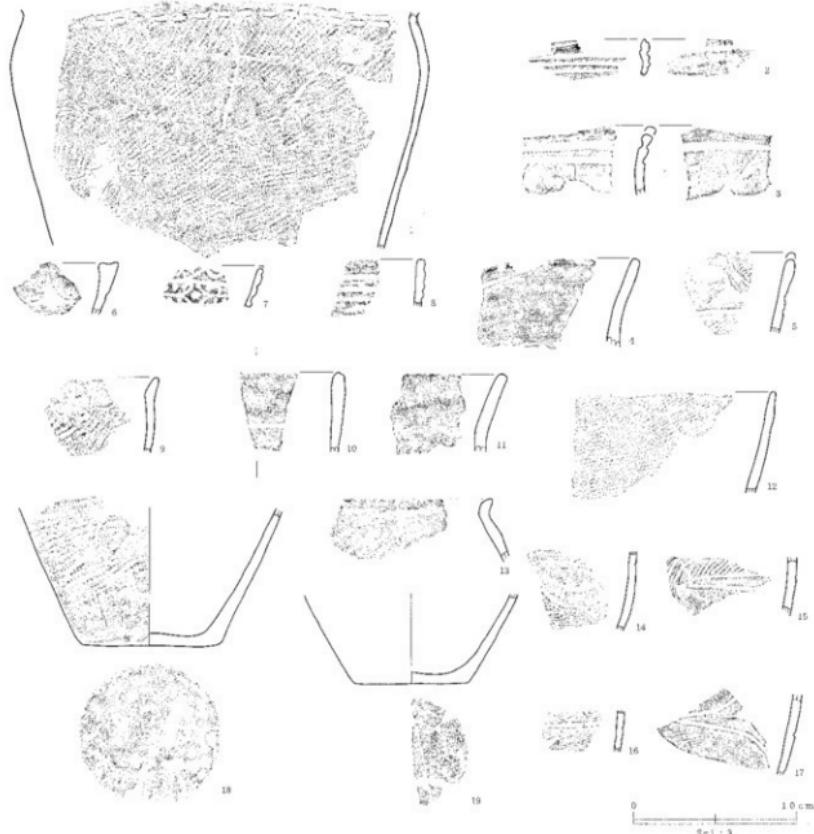
(2) VII層出土遺物（第16図）

VII層からは土器片230点、鍾石器1点の計231点の遺物が出土している。それらは主に绳文時代後期から弥生時代中期にかけてのもので、そのうちの土器片17点を図示している（第16図）。

1は弥生土器窓の頸部から肘部下半にかけての大型破片で、肘部上半がやや膨らみ頭部でくびれて外反する。頭部下端には施文具を斜め方向に押付け施した列点文があり、胴部にはLR繩文が施文される。所属時期は列点文などの特徴から中期前半頃に位置づけられよう。

2は胴部上半が内湾気味に膨らみ口縁部が外反するもので、口縁部が波状となり胴部には丁字文が施文される台付浅鉢と推定される。3は広口壺の口縁部片で、口縁部上端の沈線内に赤彩の痕跡が認められる。2・3のような特徴を有するものは、概ね繩文時代晩期末～弥生時代前期に位置づけられる。7は小波状口縁の深鉢の口縁部片である。弧線文と刻印で羊齒状文風モチーフを描出しており晚期初頭（大泊B式）の所産と考えられる。

5は肥厚する山形突起、6は低い山形突起があり、ともにその直下に三叉文が施文される深鉢の口縁部片である。15は入組文状の文様が施文された胴部片で、17は三叉文状に器面が彫去され胴部片である。14・16はVII層出土で後期末葉～最終末に位置づけられた深鉢（第24図30、A-92）と同一個体である。これらの土器は山形突起や入組文、三叉文などの特徴から後期末葉に位置づけられる。



測量番号	地層番号	遺物名	基本形態	種	規	属	性	内	外	備考	写真番号
第16番1	B-1	瓦器	筒瓦上唇	型	規範	圓底-直腹	神農文・L.直腹文	ナギ	複数	複数	34-1
第16番2	A-5	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文	ナギ	瓦律	34-2	
第16番3	A-3	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文(外唇)・L.直腹	ナギ	複数	複数	34-3
第16番4	A-4	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文	ナギ	瓦律	34-4	
第16番5	A-6	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文	ナギ	外唇に炭化物付着	34-5	
第16番6	A-10	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文	マメツ	マメツ	34-6	
第16番7	A-9	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文	ナギ	外唇に炭化物付着	34-7	
第16番8	A-8	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文?	ナギ	マメツ	34-8	
第16番9	A-6	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-直腹文	マメツ	マメツ	34-9	
第16番10	A-1	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	三方キ-山形文(缺頭)	ナギ	外唇に炭化物付着・白色斑状物質多量	34-9	
第16番11	A-7	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	三方キ-直腹	ナギ	マメツ	34-10	
第16番12	A-11	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	三方キ-山形文	ナギ	外唇に炭化物付着	34-11	
第16番13	A-9	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	L.直腹文	マメツ	マメツ	34-12	
第16番14	A-13	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	L.直腹文	ナギ	外唇に炭化物付着	34-13	
第16番15	A-15	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-L.直腹文	ナギ	マメツと同一個体・白色斑状物質多量	34-15	
第16番16	A-16	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文-L.直腹文	ナギ	マメツと同一個体・白色斑状物質多量	34-15	
第16番17	A-17	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文- L.直腹文	ナギ	マメツと同一個体・白色斑状物質多量	34-16	
第16番18	A-14	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	山形文- L.直腹文	ナギ	マメツ	34-17	
第16番19	A-26	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	L.R.直腹-直腹に大字無	マメツ	外唇に炭化物付着	34-18	
第16番20	A-25	瓦器	筒文-凸唇	規	規	直腹	L.R.直腹-直腹に大字無	ナギ	外唇に炭化物付着	34-19	

第16図 VII層出土遺物

6 VII層の造構と遺物

VII層からは溝状造構1条と性格不明造構3基、河川跡1条が発見された。

(1) 溝状造構

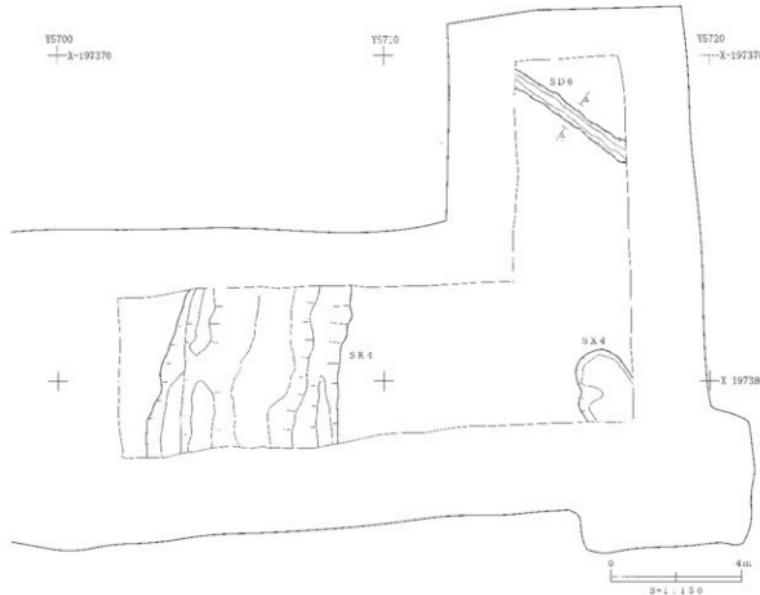
① SD 6 溝状造構 (第18図)

調査区北端をN-35-E方向に4m以上伸びる溝状造構である。上幅35cm~60cm、下幅13~25cm、深さ11cmで、断面形は扁平なU字形である。堆積土は黒色粘土による単層で、縄文土器片が2点出土している。



造構名	層位	上色	土性	備考					
SD 6	1	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	しまり強く、飛化鉄を少量、砂を微量含む					
図版番号	登録番号	造構名	基本層位	種別	器形	部位	外面	内面	備考
第17図	A-12	SD 6	Ⅳ層中	縄文土器	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	38-1

第17図 SD 6溝状造構断面図・出土遺物

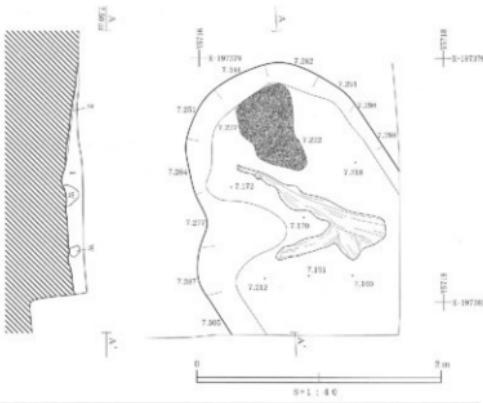


第18図 VII層上面造構配置図

(2) 性格不明遺構

① SX4 性格不明遺構 (第19図)

調査区の東南端に位置し、調査区外に延びている。平面形は不明であるが、長さが2.5m以上、幅1.9m、深さ18cm程である。堆積土はすり鉢状に凹んだ底面より樹根が出土し、周辺には炭化物が分布していた。遺物は出土していない。



第19圖 SX4性格不明遭撲平面・断面図

(3) 河川跡

① S B 4 河川跡（第18・20図）

調査区の西側で南北方向に5m程以上延びる河川跡である。

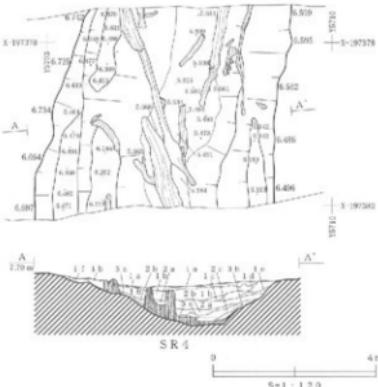
上幅5.9m、下幅0.6m、深さ1m程である。
堆積土は3層に大別される。多くの植物遺体と縄文土器片が出土した。

堆積土の上方から縹文土器片の出土が多く、中位からはトチ・クルミなどの植物遺体を多く出土する。さらに中位からは上層に含まれていなかった大形の木片等が含まれている。

② S.B.4河川跡出土遺物

S R 4からは遺物230点が出土している。それらは主に
縄文時代晩期から弥生時代前半にかけてのもので、その
うちの22点を図示した(第21・22図)。

7・8は胸部から口縁部にかけて直線的に外傾する浅鉢である。7は口縁直下に2条沈線、胸部には変形工字文にな



層構名	層位	土色	土性	備考
SR4	1a	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰色砂・植物遺体を含む
	1b	10YR4/1 深褐色	シルト	植物遺体、グリナ化した砂を含む。南壁セクション図のSR4-1と対応する層
	1c	10YR2/1 黒色	シルト	植物遺体を含む
	1d	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰色砂・植物遺体を含む。南壁セクション図のSR4-2と対応する層
	1e	10YR5/1 深褐色	粘質シルト	やや粘性強い
	1f	10YR6/1 深褐色	粘質シルト	粘性強く、炭化物を少量含む
	2a	10YR2/1 黒色	混疊シルト	大量の植物遺体、褐色砂を含む。南壁セクション図のSR4-4と対応する層
	2b	10YR3/1 黒褐色	粘質土	大量的植物遺体を含み、粒子細かい。南壁セクション図のSR4-5と対応する層
SR5	2c	10YR2/2 黑褐色	混疊シルト	灰色砂を含み、塑性を呈す
	3a	10YR2/1 黑色	砂	グリナ化した粒子が細かくならなる。南壁セクション図のSR4-8と対応する層
	3b	10YR5/1 黒褐色	粘質シルト	粘性強く、やや粘り強い
	3c	10YR5/1 黒褐色	粘質シルト	粘性強く、やや粘り強い
	3d	10YR5/1 黒褐色	粘質シルト	粘性強く、やや粘り強い

第20図 SB4河川跡平面図・断面図

る可能性のある平行沈線が施文され、8は反転部が接する変形工字文が施文される。9は頭部下半が外反しその上半が内溝する浅鉢の口縁部で、口縁直下に4条の平行沈線が施文される。これら浅鉢はその特徴から大まかに縄文時代晚期～弥生時代前期に位置づけられる。

1は深鉢でほぼ完形に復元されている。胴部は全体的に膨らみ頭部でくびれ口縁部は外反する。口縁には8個の山形突起があり波状を呈している。4～6も頭部でくびれ口縁部が直立しないし外反する深鉢であり、17・18・21・22も同様のものと考えられる。いずれにも炭化物の付着が顕著に見られる。これらの深鉢には口縁部下端の列点文が認められないことから、その年代的な位置づけは上記の浅鉢と同様となる可能性が考えられる。

10・13～15は胴部から口縁部にかけてくびれずに立上る深鉢のII縁部である。文様は口縁部に集約し玉抱三叉文、入組文、三叉文などが施文される。これらの特徴から縄文時代晚期初頭に位置づけられる。

2は胴部が軽く膨らみ頭部でくびれ口縁部が短く外反する深鉢の大型破片である。II縁には山形突起があり、口縁部にはR L 縄文が施文される。胴部上半の文様帶には円文、入組文、三叉文を配し魚腹状三叉文を想起させるモチーフを展開している。2のような器形と文様の類例は、宮城県田柄貝塚Ⅳ群土器（晚期初頭）の中に確認される（宮教委：1986、第62図1）。ただし2には先行的な要素である山形突起が認められることから後期末～晚期初頭に位置づけておく。

11・12・23・24は三叉文、横長楕円形彫去、刻目のある入組文などが施文されているもので、その特徴から後期末に位置づけられる。

(4) 離層出土遺物

VII層からは遺物465点が出上している。それらは主に縄文時代後期末葉のもので、53点を図示した（第23・24・25図）。

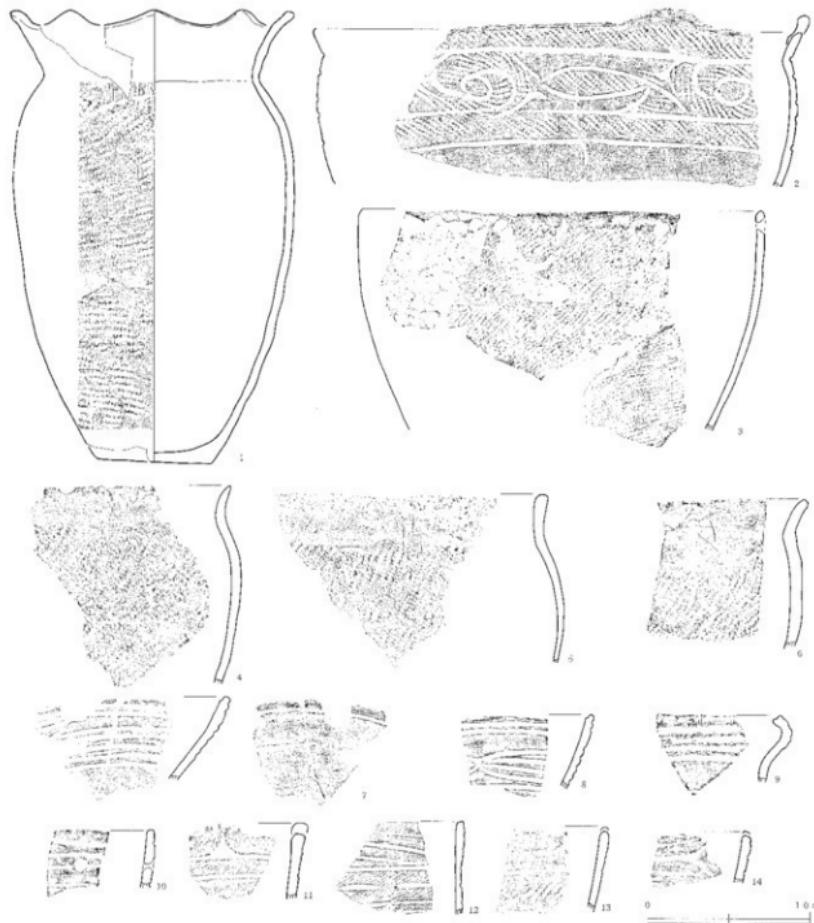
1・2は同一個体で胴部から口縁部へくびれなく立上る深鉢である。口縁部に低い山形突起がある。文様は胴部上半にあり、弧線文や平行沈線で区画された内部に連続した刺突文が施文される。

3・4は山形突起のある深鉢で、3は肥厚するやや大きな突起を有しその直下に三叉文が施文される。4は突起の下位に円文と弧線文により玉抱三叉文状のモチーフが描出されている。6・7・13・14は同一個体と考えられる平縁の深鉢で、口縁直下に円文と弧線文を重ねるように描きそれを抱くように三叉文を配している。8・12も別の同一個体であるが同様のモチーフである。5・11・28・29は細かな縄文が充填された入組み文が施文されている。29・30は胴部が膨らみ長い口縁部が外反する深鉢であるが、いずれもややくびれる頭部に横長楕円形に器面を彫去した文様帶がある。また、30・31・32・35は同一個体で胴部には弧線文と三叉文が施されており、53はその台付底部の可能性がある。

以上の土器群については、1・2は田柄貝塚VI群土器（前掲）、里浜貝塚風越地点III群土器（小井川2004）に、その他の上記のものは田柄貝塚V群土器、里浜貝塚風越地点IV群土器に類例が求められ、後期末葉から最終末に位置づけられる。

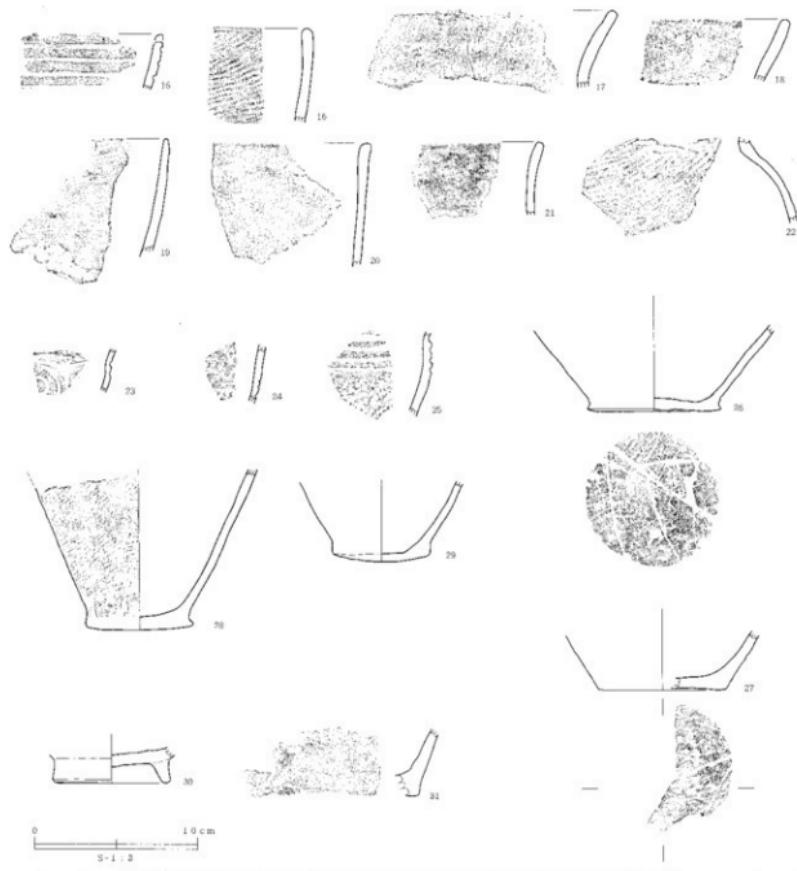
15・43はII縁部に玉抱三叉文などの文様が集約されており晚期初頭に位置づけられる。

その他の無紋や地文のみの深鉢などは上記の時間幅の中で捉えられるものと考えられる。なお、16はL R の原体にRの燃り紐を巻きつけた付加条縄文である。



层位号	标本号	器物名	器物部位	形 别	质 别	形 态	外 表	内 表	描 叙	号 牌
第21层	A-27	S 34.1.1#	陶器	陶土-夹石	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落-1层17.5cm、厚度27.8cm、烧造2cm	25-1
第21层	A-28	S 34.2#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-2
第21层	A-29	S 34.3#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	L型足-凸弦带	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-3
第21层	A-30	S 34.4#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	L型足-凸弦带	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-4
第21层	A-31	S 34.1.1#	陶器	陶土-夹石	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-5
第21层	A-32	S 34.2#	陶器	陶土-夹石	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-6
第21层	A-33	S 34.1.1#	陶器	陶土-夹石	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-7
第21层	A-34	S 34.1.1#	陶器	陶土-夹石	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-8
第21层	A-35	S 34.1.1#	陶器	陶土-夹石	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-9
第21层	A-36	S 34.1.2#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-10
第21层	A-37	S 34.1.2#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-11
第21层	A-38	S 34.1.2#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-12
第21层	A-39	S 34.1.2#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-13
第21层	A-40	S 34.1.2#	陶器	陶土-上层	泥质	凸弦带-瓶形	凸弦带起-三瓣足、L形脚尖	三瓣足	外表面有氧化物多层剥落	25-14

第21図 SR4河川跡出土遺物(1)



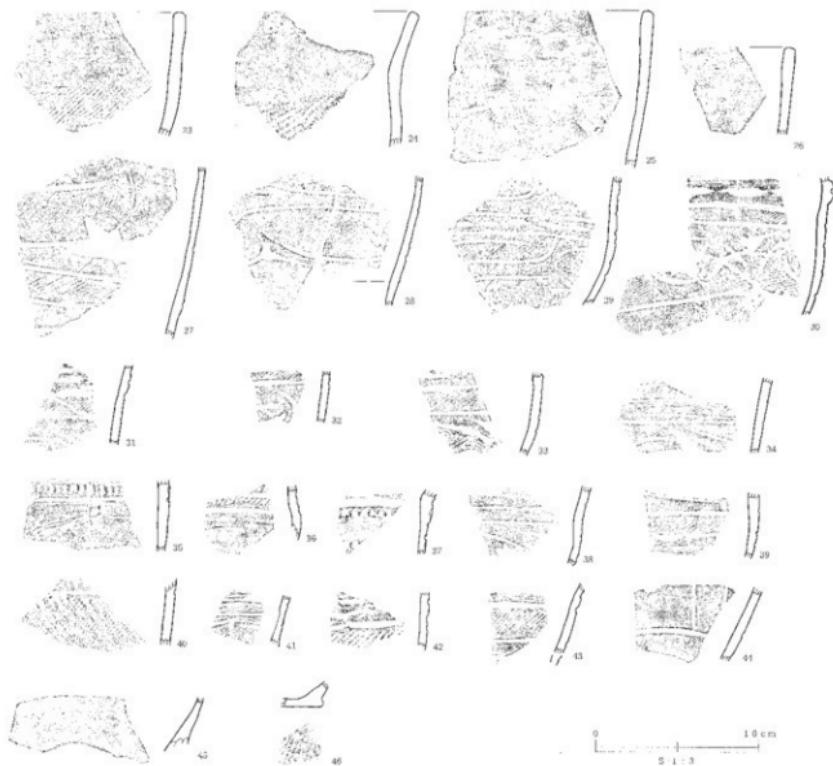
器物番号	文様	時代	主な形状	種別	質	部位	外観	内面	備考	参考番号
SR4K15	A-30	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	小底状口縫、三叉文、平行底縫	三叉文	外面に焼化物付着	30-1a
SR4K16	A-43	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	表面に焼化物付着	30-1b
SR4K17	A-47	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1c
SR4K18	A-43	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1d
SR4K19	A-48	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1e
SR4K20	A-45	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1f
SR4K21	A-44	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1g
SR4K22	A-51	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1h
SR4K23	A-48	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1i
SR4K24	A-60	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1j
SR4K25	A-33	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	平行底縫、三叉文	平行底縫、三叉文	外面に焼化物付着	30-1k
SR4K26	A-58	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	平行底縫、三叉文	平行底縫、三叉文	外面に焼化物付着	30-1l
SR4K27	A-69	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	外面に焼化物付着	30-1m
SR4K28	A-59	SR4.2.前	骨質 縫文土縫	漆棒	骨質	口端部	三叉文(深部底縫)	三叉文	内面に焼化物付着	30-1n
SR4K29	A-97	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	内面に焼化物付着	30-1o
SR4K30	A-61	SR4.1.前	骨質 縫文二斜	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	内面に焼化物付着	30-1p
SR4K31	A-60	SR4.2.前	骨質 縫文土縫	漆棒	骨質	口端部	三叉文	三叉文	内面に焼化物付着	30-1q

第22図 SR4河川跡出土遺物(2)



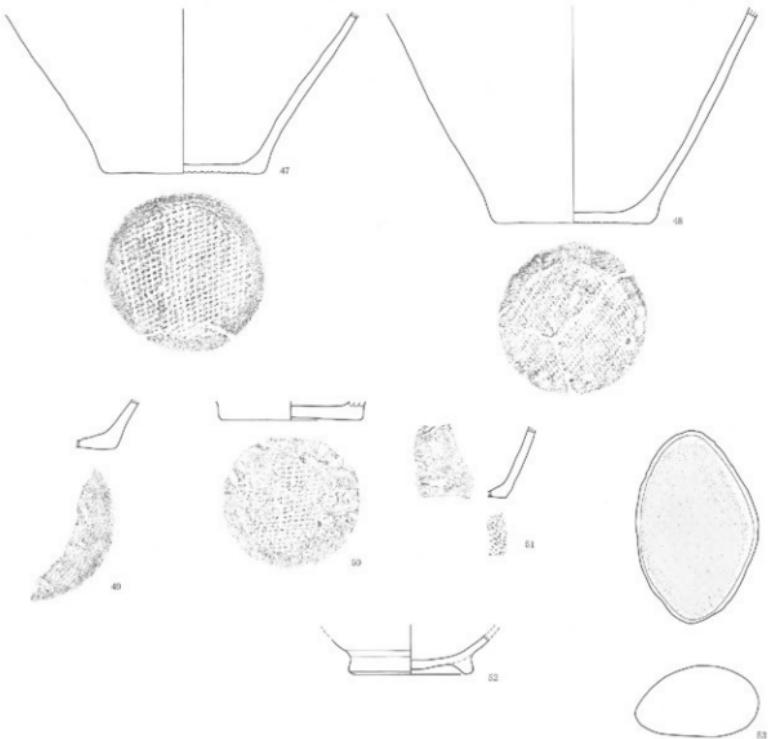
器物番号	登錄番号	遺物名	基本層番号	種類	種別	剖面	部位	馬	内	備考	写真番号
第23H1	A-63	漆器残	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、鍍銀文、花蝶、斜側、三方身	三方身	三方身	外周に無彩色打墨	36-1	
第23H2	A-64	漆器残	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、鍍銀文、花蝶、斜側、三方身	三方身	三方身	外周に無彩色打墨、A-63と同一個体	36-2	
第23H3	A-65	漆器残	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、花蝶、L字模文	三方身	三方身		36-3	
第23H4	A-67	漆器残	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、鍍銀文、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-4	
第23H5	A-68	漆器残	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、鍍銀文、三方身、L字模文	三方身	三方身	外周に無彩色打墨	36-5	
第23H6	A-69	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	外周に無彩色打墨、A-68と同一個体	36-6	
第23H7	A-70	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	外周に無彩色打墨、A-69と同一個体	36-7	
第23H8	A-74	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	外周に無彩色打墨	36-8	
第23H9	A-72	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	外周に無彩色打墨	36-9	
第23H10	A-76	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	外周に無彩色打墨	36-10	
第23H11	A-66	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-11	
第23H12	A-73	瓦器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	正和昭和丙酉年、A-74と同一個体	36-12	
第23H13	A-71	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	白色斜状物質多量、A-69と同一個体	36-13	
第23H14	A-77	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身	白色斜状物質多量、A-69と同一個体	36-14	
第23H15	A-75	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	小透口縫、三方身、L字模文	三方身	三方身	PVC筒に無彩色打墨	36-15	
第23H16	A-78	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-16	
第23H17	A-79	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-17	
第23H18	A-80	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-18	
第23H19	A-81	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-19	
第23H20	A-82	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-20	
第23H21	A-85	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-21	
第23H22	A-82	漆器	漢文上唇	漆器	口唇部	山形突起、三方身、L字模文	三方身	三方身		36-22	

第23図 VII層出土遺物(1)



器物番号	形態番号	遺物名	基準測定	種 別	器 形	施 工	外 国	内 面	備 考	基高番号
第24N23	A-83	骨器中	陶文土器	深鉢	口部厚・側面薄	三刀手・L.火燒火	三刀手	三刀手		26-21
第24N24	A-84	骨器中	陶文土器	深鉢	口部厚・側面薄	三刀手・L.火燒火	ナゲ	外面部に三化物多量		26-24
第24N25	A-85	骨器中	陶文土器	深鉢	口部厚・側面薄	三刀手	ナゲ	外面部に炭化物多量		26-25
第24N26	A-87	骨器中	陶文土器	深鉢	口部厚	三刀手	ナゲ	外面部に炭化物多量・A-86と同一個体		26-26
第24N27	A-88	骨器下	陶文土器	深鉢	斜部	弧擦文・沈道・L.火燒火	ナゲ			26-27
第24N28	A-89	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・三叉文・L.火燒火	ナゲ			26-28
第24N29	A-90	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・横曲線内折面有・L.火燒火	ナゲ			26-29
第24N30	A-92-94	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	海螺・火燒火	ナゲ	白色斜状物質多量		26-30
第24N31	A-95	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・横曲線内折面有・火燒文・L.火燒火	ナゲ	白色斜状物質多量・A-92と同一個体		26-31
第24N32	A-96	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・火燒火	ナゲ	白色斜状物質多量・A-92と同一個体		26-32
第24N33	A-98	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・火燒文・沈道・L.火燒火	ナゲ			26-33
第24N34	A-99	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・火燒火・L.火燒火	ナゲ	白色斜状物質多量・A-92と同一個体		26-34
第24N35	A-100	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・火燒火	ナゲ	外面部に炭化物多量		26-35
第24N36	A-103	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒火・神目	ナゲ			27-36
第24N37	A-104	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒・神目	三刀手			27-37
第24N38	A-97	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・沈道	三刀手			27-38
第24N39	A-98	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・火燒・L.火燒火	三刀手	A-92と同一個体		27-39
第24N40	A-105	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒・火・火燒火	ナゲ	外面部に炭化物多量		27-40
第24N41	A-101	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒文・火・L.火燒火	火隨			27-41
第24N42	A-100	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒・L.火燒火	火隨	外面部に炭化物多量		27-42
第24N43	A-102	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒・L.火燒火	ナゲ	外面部に炭化物多量		27-43
第24N44	A-107	骨器中	陶文土器	深鉢	斜部	火燒・L.火燒火	三刀手	外面部に炭化物多量		27-44
第24N45	A-110	骨器中	陶文土器	深鉢	底部	三刀手	ナゲ			27-45
第24N46	A-116	骨器中	陶文土器	深鉢	底部	底部に火焼跡				27-46

第24図 VII層出土遺物(2)



0 1.0 cm
N=1:2

試験番号	型鉢番号	遺物名	基本属性	縦	横	高	外	内	備	写真番号
西25B6C7	A-113	環状骨	圓文土器	深8mm	口幅~底径	三才系・施面に網代彫	ナデ			37-47
西25B6A8	A-111	環状骨	圓文土器	深8mm	口幅~底径	三才系・施面に網代彫	ナデ			37-48
西25B6C9	A-114	環状骨	圓文土器	深8mm	底径	施面に網代彫				37-49
西25B6C10	A-112	環状骨	圓文土器	底径	底径	施面に網代彫				37-50
西25B6C11	A-115	環状骨	圓文土器	底径	底径	施面に網代彫	ナデ			37-51
西25B6C12	A-117	環状骨	圓文土器	深8mm	口幅~底径	自然剥落物質多量・A-92と同一致				37-52

試験番号	鉢形番号	遺物名	基本属性	縦	横	高	縦	横	備考	写真番号
西25B6C13	K-6	環状骨	網代彫	11.4	7.2	4.3	435	磨滅あり		37-53

第25図 VIII層出土遺物(3)

(5) その他の遺構

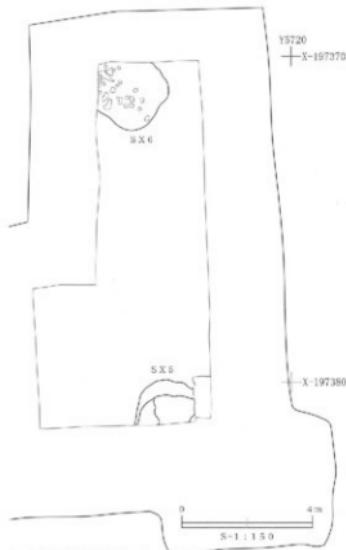
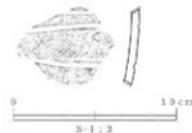
① S X5 性格不明遺構 (第27図)

調査区の東南端に位置し、調査区外に延びている。平面形は不明であるが、長さ1.9m以上、幅1.4m、厚さ8cm程である。中心部に炭化物が集中している。

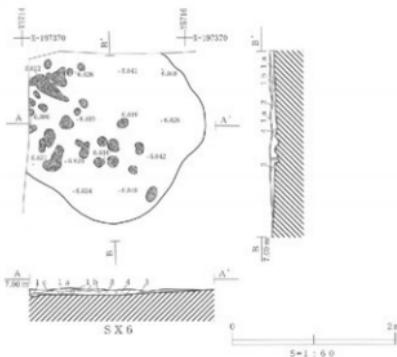
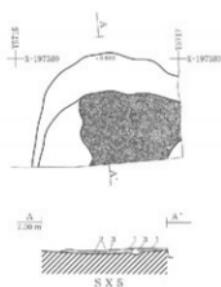
② S X6 性格不明遺構 (第27図)

調査区の北部に位置し、調査区外に延びている。平面形は不明であるが、長さ2.3m以上、幅2m、厚さ10cm程である。

この範囲の中では炭化物の集中する密度に違いがある。遺物は縄文土器片が2点出土している。



第26図 VIII層中遺構配置図



遺構名	層位	土色	土性	備考
SX5	1	10YR4/6 褐色	シルト	粘性有
	2	10YR8/1 灰白色	シルト	粘性有
	3	10YR6/1 黑灰色	シルト	炭化物を含む。粘性有
SX6	1a	10YR6/1 黑灰色	シルト	粘土
	1b	2.5YR4/4 に赤い赤褐色		炭化物
	1c	10YR3/1 黑褐色	シルト	少量化した炭化物を含む。粘性有
	2	10YR4/1 褐色	シルト	粘性有
	3	10YR3/1 黑褐色	シルト	粘性有
	4	10YR8/1 灰白色	シルト	粘性有

図版番号	登録番号	遺構名	基本層位	種別	器形	部位	外面	内面	備考	写真番号
第27図	A-99	SX6	Ⅵ層	縄文土器	深鉢	脚部	沈底・L.K.縄文	ナデ		39-1

第27図 SX5・6平面図・断面図・SX6出土遺物

第3章　まとめ

1. 今回の調査地点は、旧字名で「館ノ内」という地名であることから北目城内の中心部と想定されたが、中世から近世の北目城跡に因る遺構は確認できなかった。
2. 今回の調査では、各層から次のような遺構が発見されているが、Ⅲ a・b層、V a・b層から検出された遺構については、出土遺物がほとんどないことから詳細な時期を特定することはできなかった。

Ⅲ a 層	井戸跡2基・ビット31基
Ⅲ b 層	小溝状遺構6条
V a 層	土坑2基・溝跡5条
V b 層	河川跡2条
Ⅶ 層	河川跡1条・遺物包含層
Ⅷ 層	溝状遺構1条・性格不明遺構3基・河川跡1条・遺物包含層

3. 今回の調査で出土した遺物としては、井戸跡や土坑から上師器、石製品、鍛石器などがあり、遺物包含層であるⅦ層・Ⅷ層及び、Ⅸ層で検出されたS R 4河川跡から縄文土器、弥生土器が出土している。

今回出土した縄文土器や弥生土器の時期は、これまでの北目城跡や隣接する郡山遺跡など周辺の調査でも出土しているもので新たな資料の追加となった。この時期の郡山低地周辺の在り方を考える上で貴重な資料である。

4. Ⅸ層からは、縄文時代後期から弥生時代中期前半までの時間幅をもった土器が出土している。弥生土器としては、頸部下端の列点文の特徴から弥生時代中期前半に位置づけられる壺の大型破片や、口字文をもち縄文時代晩期末葉から弥生時代前期に位置づけられる台付浅鉢や広口壺がある。縄文土器には、羊齒状文風モチーフから晩期初頭の大洞B式に比定されるものや、山形突起や入組文、三叉文の特徴から後期末葉から最終末に位置づけられるものがある。

5. S R 4河川跡からは、トチやクルミ、さらに大形の樹木片が出土している。縄文土器片も多く含まれていることから、居住域等が近くに存在する可能性がある。

6. S R 4河川跡からの出土遺物には、2条ないし4条の平行沈線文や変形工字文が施された浅鉢や、胸部が全体的に膨らみ頸部でくびれ外反する口縁部下端に列点文がみられない深鉢など、縄文時代晩期から弥生時代前半に位置づけられるものがある。そのほか、口縁部が山形突起となり胸部上半の文様帶に円文、入組文、三叉文を配し魚眼状三叉文を想起させる土器もある。このような器形と文様は、宮城県田柄貝塚Ⅷ群土器に類例がもとめられ縄文時代晩期初頭に位置づけられる。

7. Ⅸ層の出土遺物は、縄文時代後期末葉から最終末の時期にまとまっている。胸部から口縁部へくびれなく立ち上がり、口縁部に低い山形突起をもつ深鉢は、胸部上半に弧線文や平行沈線で区画された内部に連続した刺突文が施されており、宮城県田柄貝塚Ⅷ群土器や里浜貝塚風越地点Ⅳ群土器に類例が求められる。そのほか、山形突起や三叉文、突起の下部に円文と弧線文により玉抱三叉文状のモチーフをもつものや、入組文をもつ土器については、宮城県田柄貝塚Ⅷ群土器や里浜貝塚風越地点Ⅳ群土器に類例が求められる。

引用・参考文献

仙台市教育委員会(1992)『郡山遺跡－第65次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第156集

仙台市教育委員会(1993)『年報15 Ⅲ-1-(6) 北目城跡』 仙台市文化財調査報告書第189集

仙台市教育委員会(1994)『年報16 2-1-(7) 北目城跡』 仙台市文化財調査報告書第204集

- 仙台市教育委員会(1999)『陸奥国分尼寺ほか発掘調査報告書VI 北目城跡第2次調査』 仙台市文化財調査報告書
第238集
- 仙台市教育委員会(2000)『鍛冶屋敷A・鍛冶屋敷前遺跡－市道富田富沢線関連遺跡発掘調査報告書－』
仙台市文化財調査報告書第156集
- 仙台市教育委員会(2000)『王ノ塙遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－発掘調査報告書I』
仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市教育委員会(2005)『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編－』 仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会(2006)『前田館跡ほか発掘調査報告書 北目城跡第4・5次調査』 仙台市文化財調査報告書
第301集
- 宮城県教育委員会(1982)『青木畠遺跡』宮城県文化財調査報告書第85集
- 宮城県教育委員会(1986)『田柄貝塚』 宮城県文化財調査報告書第111集
- 宮城県教育委員会(1990)『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集
- 仙台市史編さん委員会(1995)『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市
- 仙台市史編さん委員会(1999)『仙台市史 通史編1 原始』仙台市
- 仙台市史編さん委員会(2000)『仙台市史 通史編2 古代中世』仙台市
- 仙台市史編さん委員会(2001)『仙台市史 通史編3 近世Ⅰ』仙台市
- 一迫町教育委員会(1998)『国史跡 山王圓遺跡 発掘調査報告書Ⅲ』
- 東北歴史資料館(1997)『里浜貝塚X－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚風越地点の調査－』東北歴史資料館資料集43
- 小井川和夫(2004)『里浜貝塚風越地点出土土器の検討』東北歴史博物館研究紀要5 17～51頁



写真1 IIIa 扇造構ビット全景（北から）

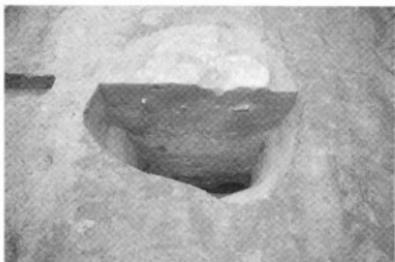


写真2 SE1 井戸跡断面（南から）

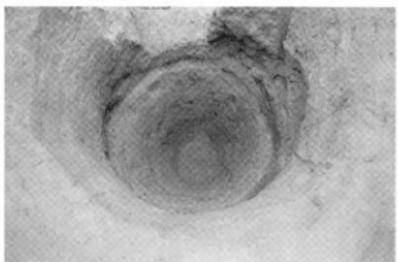


写真3 SE1 井戸跡全景（南から）

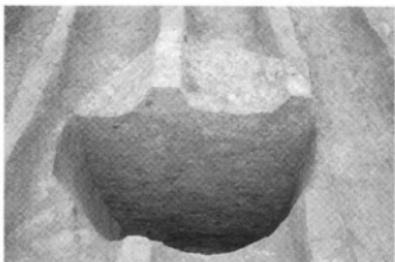


写真4 SE2 井戸跡断面（南から）

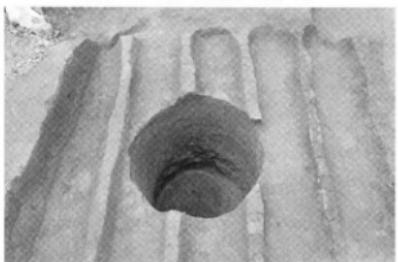


写真5 SE2 井戸跡全景（南から）



写真6 IIIb層遺構小溝状遺構全景（北東から）



写真7 SD1溝跡全景（北から）

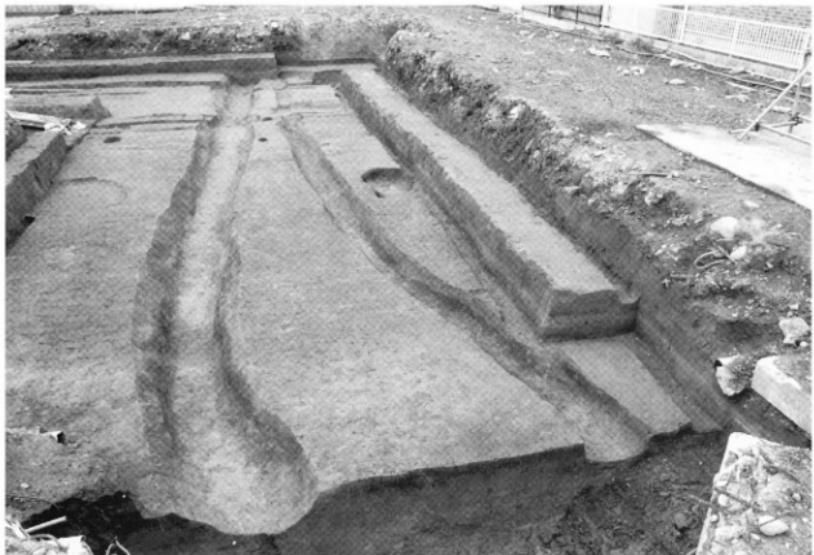


写真8 SD4・5溝跡全景（西から）



写真9 SD2・3
溝跡全景（南から）

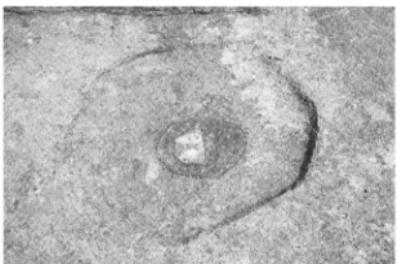


写真10 SK4土坑全景（南から）



写真11 SK5土坑断面（東から）

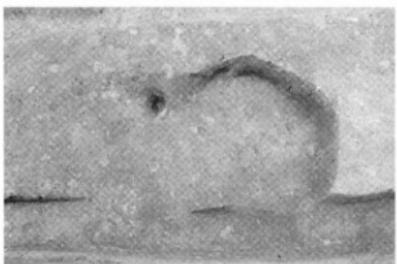


写真12 SK5土坑全景（南から）

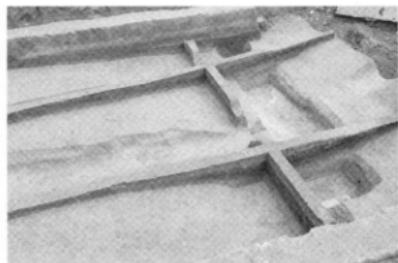


写真13 SR1河川跡全景（北から）

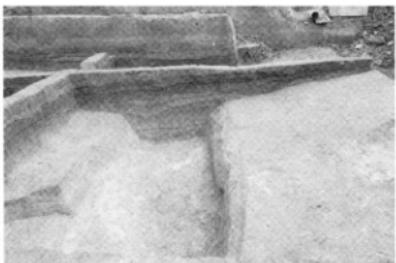


写真14 SR1河川跡断面（北から）



写真15 SD6溝状遺構断面（東から）



写真16 SD6溝状遺構全景（北から）



写真17 Ⅴ層上面検出SD6・SX4全景（南から）



写真18 SX4性格不明遺構検出状況（東から）



写真19 SX4性格不明遺構全景（東から）

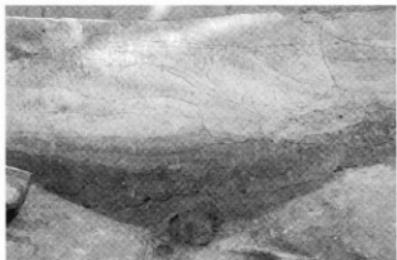


写真20 SR4河川跡調査区断面（北から）



写真21 SR4河川跡全景（南から）



写真22 SR4河川跡全景（西から）



写真23 VIII層東側遺物出土状況（南から）



写真24 SX5性格不明遺構検出状況（北から）

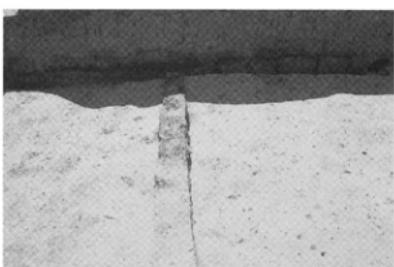


写真25 SX5性格不明遺構全景（南から）

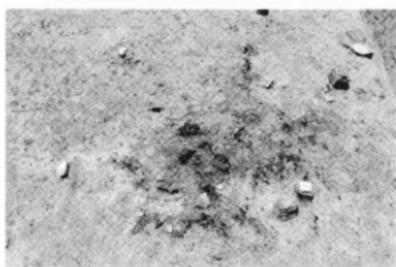


写真26 SX6性格不明遺構検出状況（東から）

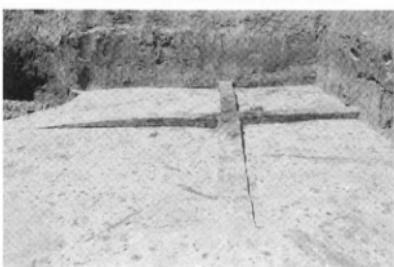


写真27 SX6性格不明遺構全景（南から）

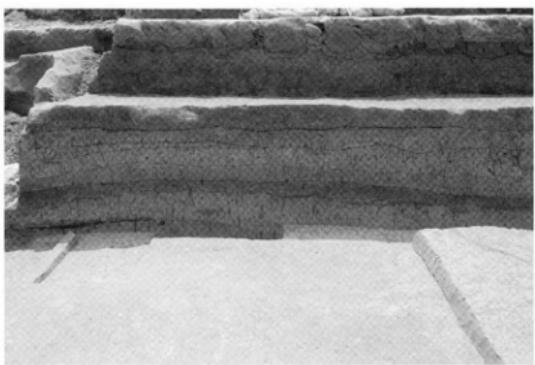


写真28 調査区南壁断面 一東一（北から）

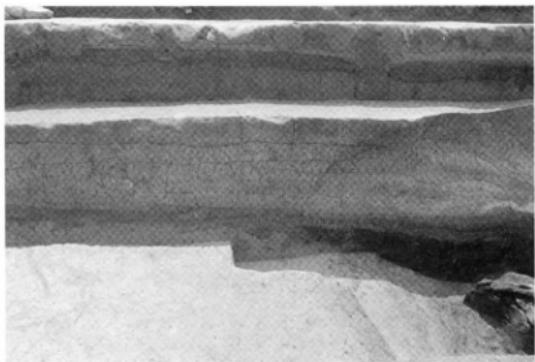


写真29 調査区南壁断面 一中央一（北から）

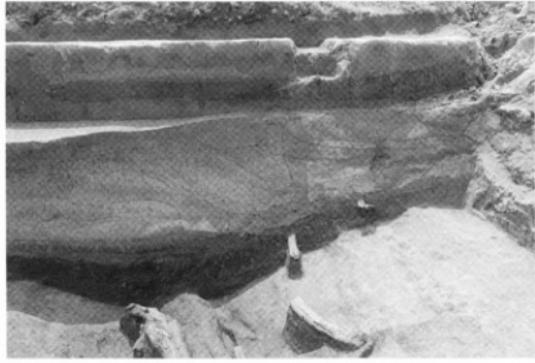
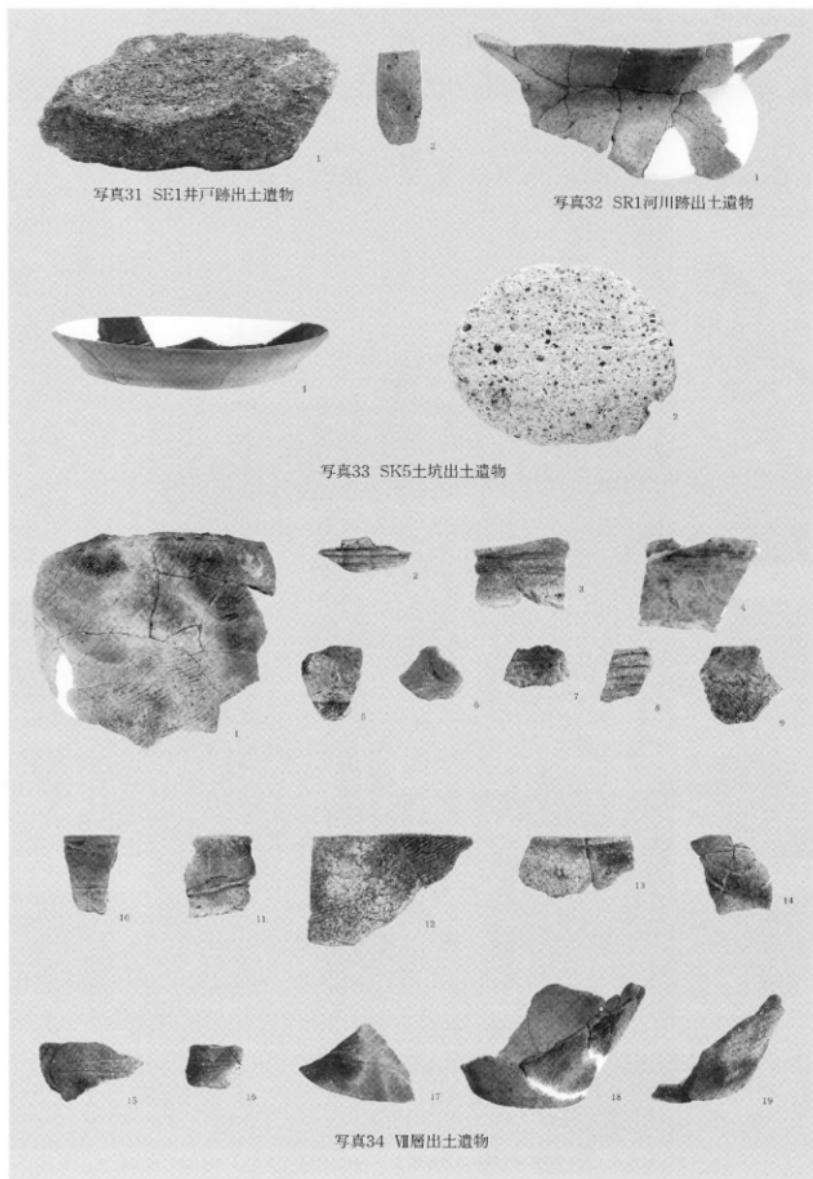


写真30 調査区南壁断面 一西一（北から）



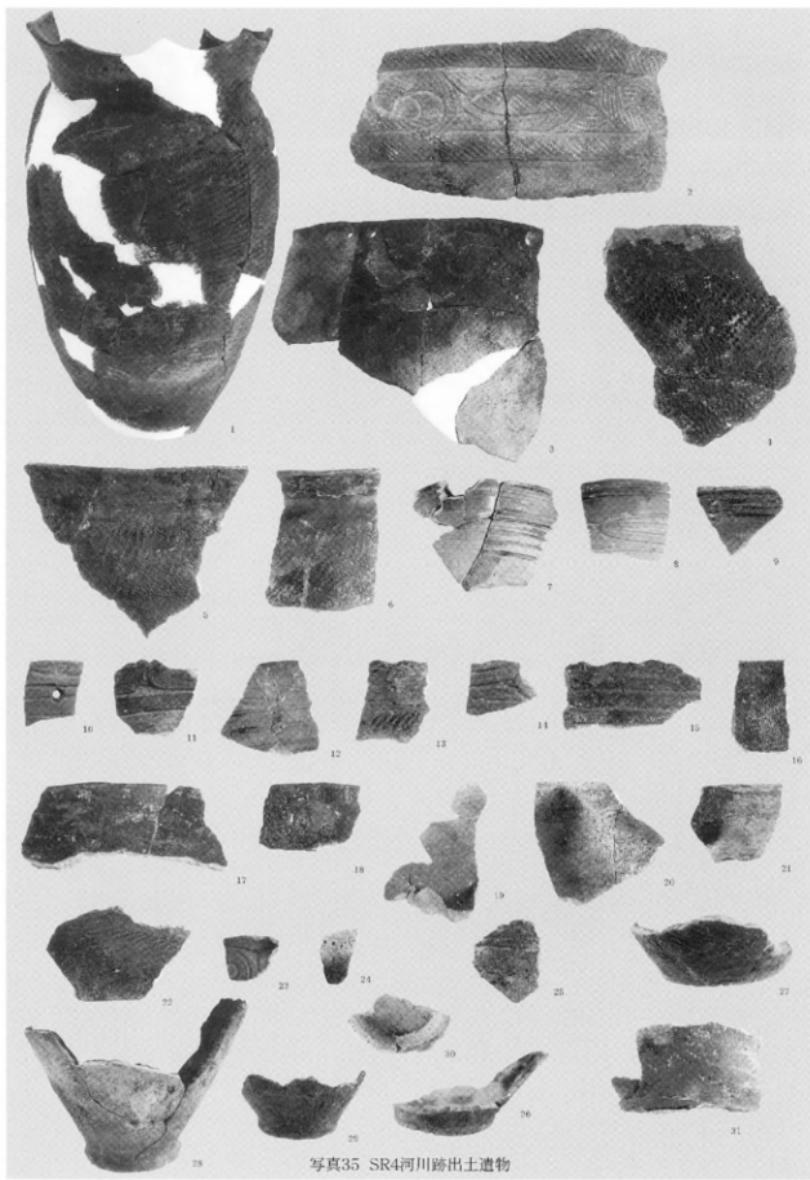


写真35 SR4河川跡出土遺物

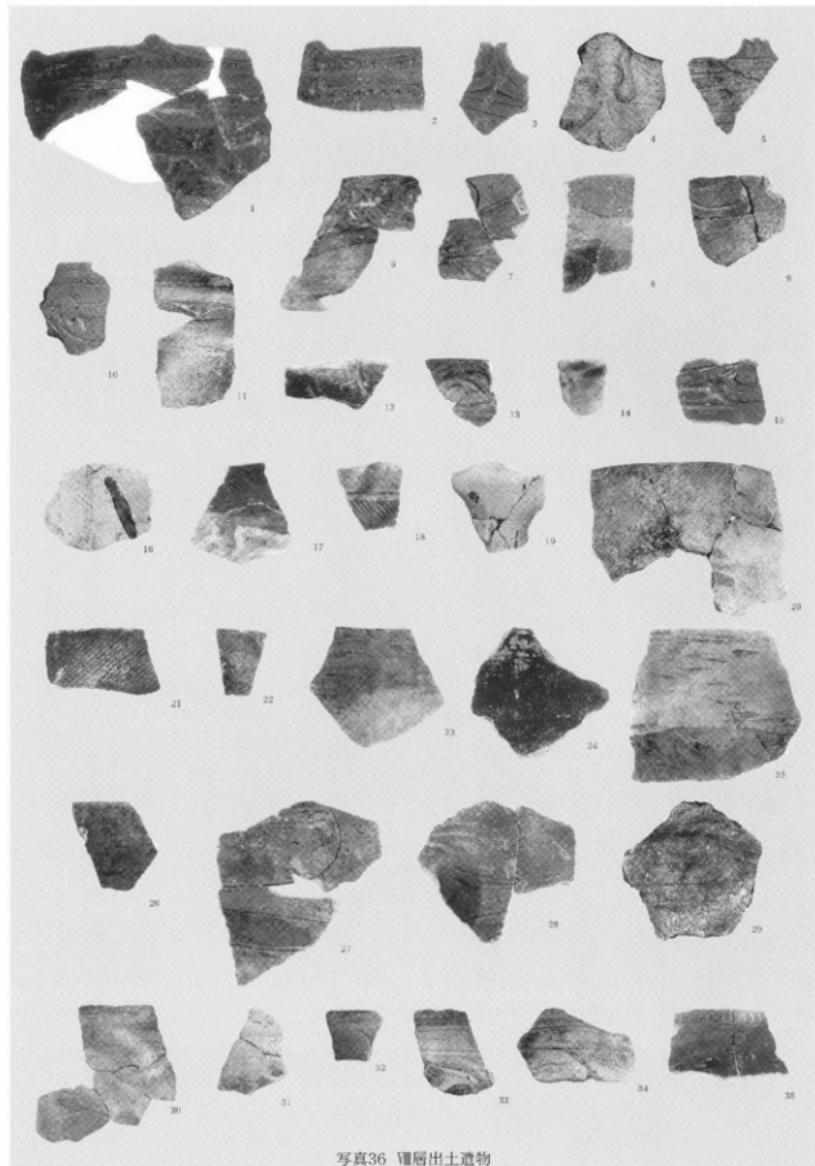


写真36 罐層出土遺物

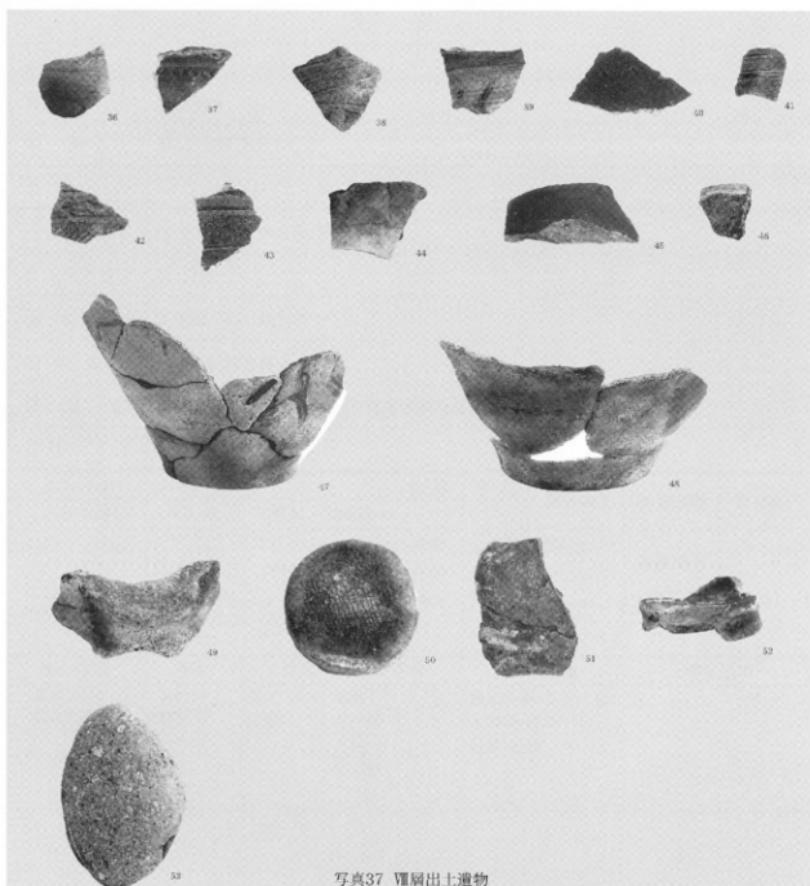


写真37 V属出土遺物

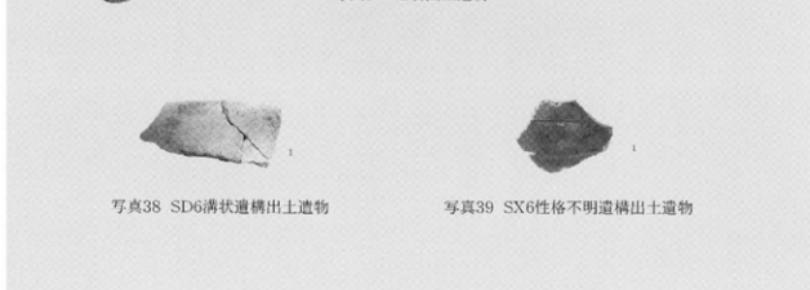


写真38 SD6溝状遺構出土遺物

写真39 SX6性格不明遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きためじょうあと						
書名	北目城跡						
副書名	第6次発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第314集						
編集者名	工藤信一郎・長島栄一						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号						
発行年月日	西暦2007年3月						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号				
きためじょうあと だい6じちょうさ 北目城跡 第6次調査	みやぎけんせんじょう たのくじゆげき こおりやまじょうさ むさし 1	04100	01029	38度 13分 19秒	140度 53分 55秒	2006・6・14 2006・8・11	発掘調査 343m ²
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北目城跡 第6次調査	城館跡 築落跡 水山跡	縄文～中・ 近世	溝跡 井戸跡 土坑 河川跡	縄文土器・弥生土器 土師器・砾石 磨石・石鉢			

仙台市文化財調査報告書第314集
北　　目　　城　　跡

-第6次発掘調査報告書-

2007年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7番1号
仙谷市教育委員会文化財課
TEL 022-214-8894

印刷 株式会社ステップス
福岡県福岡市南区津水三丁目21-3
TEL 092-562-5855

